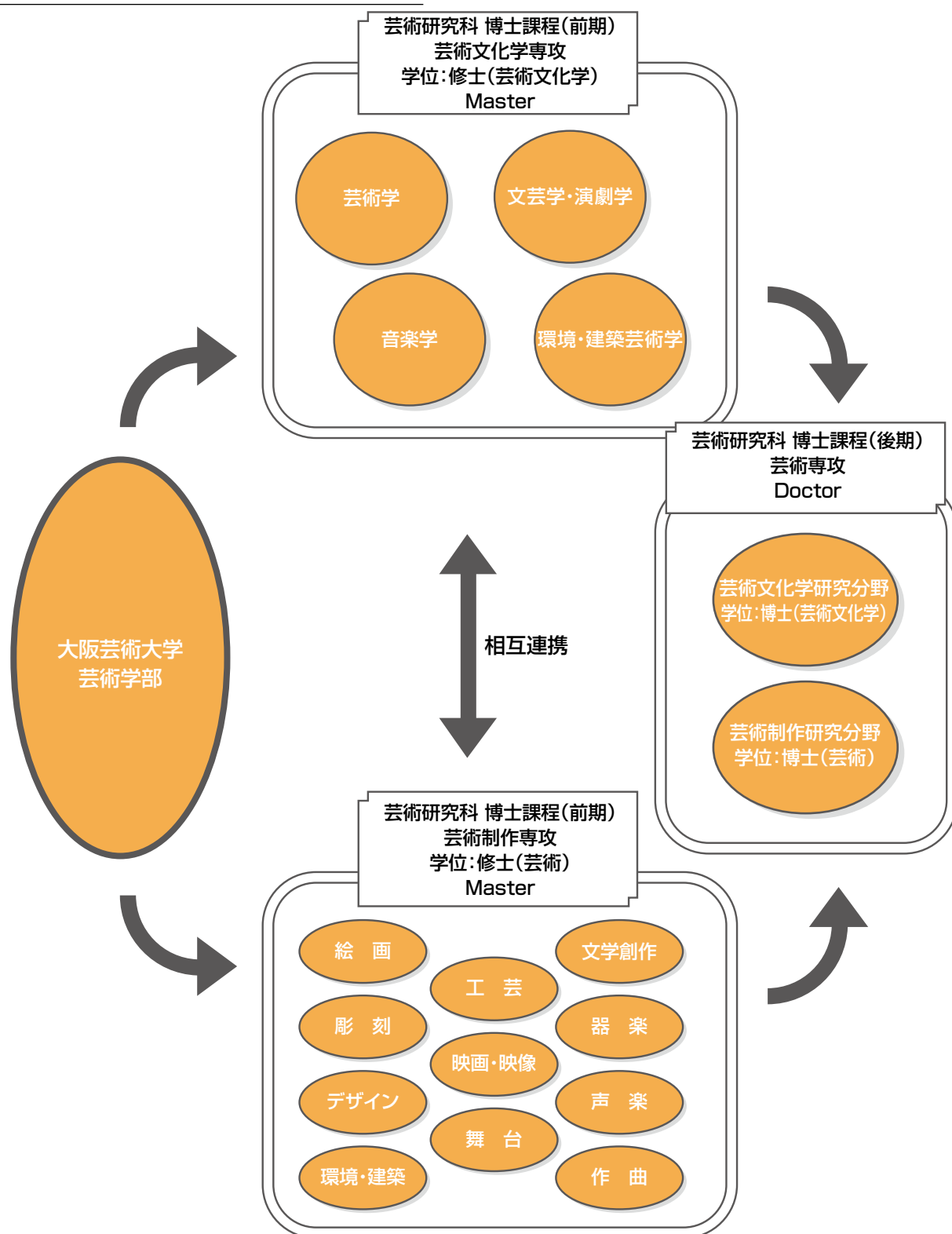


大阪芸術大学 大学院の構成



募集定員

芸術研究科博士課程(前期)芸術文化学専攻	20名
芸術研究科博士課程(前期)芸術制作専攻	60名
芸術研究科博士課程(後期)芸術専攻	20名

Osaka
University
of Arts
Graduate School

大学院要覧

芸術研究科
博士課程〔前期・後期〕
芸術文化学専攻
芸術制作専攻

履修要項一覧(科目担当)

◆芸術研究科 博士課程(前期)

研究指導担当教員 芸術文化学専攻／芸術制作専攻

◆芸術研究科 博士課程(前期)

両専攻共通

◆芸術研究科 博士課程(後期)

研究指導担当教員 芸術専攻／芸術文化学研究分野

研究指導担当教員 芸術専攻／芸術制作研究分野

2021年度(予定) 芸術研究科 博士課程(前期)

各科目担当者につきましては、変更する可能性があります。

履修要項一覧(研究指導担当教員)

芸術文化学専攻

研究領域	科目名	配当年次	単位	担当教員
●芸術学	芸術学研究演習	1	4	青山 勝／安藤英由樹／五十嵐公一／石井元章／瀧本雅志／長野順子△
		2	4	
●文芸学・演劇学	芸術学基礎演習	1・2	2	○五十嵐公一／※安藤英由樹
		1	4	
	文芸学・演劇学研究演習	2	4	勝田安彦／団野恵美子／出口逸平
●音楽学	文芸学・演劇学基礎演習	1・2	2	出口逸平
		1	4	
	音楽学研究演習	2	4	長野順子△／前川陽郁
●環境・建築芸術学	音楽学基礎演習	1・2	2	田之頭一知
		1	4	
	環境・建築芸術学研究演習	2	4	加治大輔／門内輝行△
共通	環境・建築芸術学基礎演習	1・2	2	加治大輔
		1	4	
計	学位(修士)論文	—	—	
			10	(50音順)

芸術制作専攻

研究領域	科目名	配当年次	単位	担当教員
●絵画	絵画研究演習	1	8	いしだふみ／泉谷淑夫☆2／久世直幸／横溝秀実△
		2	8	
●彫刻	彫刻研究演習	1	8	竹屋 修
		2	8	
●デザイン(写真含む)	デザイン研究演習	1	8	織作峰子／高橋善丸☆2／中川志信／吉川直哉
		2	8	
●環境・建築	環境・建築研究演習	1	8	久保清一／田口雅一／福原成雄△／門内輝行△
		2	8	
●工芸	工芸研究演習	1	8	小野山和代☆1／田嶋悦子／三好正豊／山野 宏
		2	8	
●映画・映像	映画・映像研究演習	1	8	大森一樹☆1／長岡野亜／西岡琢也
		2	8	
●舞台	舞台研究演習	1	8	内藤裕敬／堀内 充／山本健翔
		2	8	
●文学創作	文学創作研究演習	1	8	有吉玉青／玉岡かおる☆1
		2	8	
●器楽	器楽研究演習Ⅰ(ピアノ)	1	8	今川裕代／熊本マリ／仲道祐子
		2	8	
	器楽研究演習Ⅱ(管弦打)	1	8	浅川和宏／漆原啓子／大野かおる／本田耕一／小川哲生△／小倉貞行／小田桐寛之／
●声楽	声楽研究演習	1	8	神田寛明／辻 浩二／木村寛仁／中谷 満／橋爪伴之／花崎 薫／東口泰之／三浦 徹
		2	8	
●作曲	作曲研究演習	1	8	永松圭子／水口 聡／三原 剛
		2	8	
共通	制作理論演習	1	2	高橋 裕／田中久美子／檜垣智也
		2	2	
計	学位(修士)作品	1	2	加治大輔／片岡 淳／笹谷純雄／重政隆文☆1／樋口光☆2
		—	—	
			18	(50音順)

教育課程概要

博士課程(前期)のカリキュラムは、芸術文化学専攻、芸術制作専攻それぞれの研究領域の研究演習科目を軸に、両専攻共通の科目を設定、異なる研究領域の科目についても履修可能な編成となっている。修業年限は2年。学生は各自が選択する研究演習科目を中心に、下記に定める履修方法にもとづいて所定の単位を修得する。各専攻の研究の主体は学生であり、必要な研究指導を受けながら自主的に研究をすすめていく。そして、修士論文もしくは修士作品の審査および最終試験に合格した者には、修士(芸術文化学)もしくは修士(芸術)の学位が授与される。

・芸術文化学専攻 修士(芸術文化学)

・芸術制作専攻 修士(芸術)

履修方法

〈芸術文化学専攻〉

- (1) 授業科目の履修は、研究指導教授の指導を受けなければならない。
- (2) 1つの研究演習科目を選択し2年間継続履修し、8単位を修得しなければならない。
- (3) 選択した研究演習と同じ研究領域の基礎演習1科目2単位を修得しなければならない。
- (4) 作品研究、原典研究、特論、プロジェクト研究演習、芸術文化研究、特殊研究の内から7科目28単位を修得しなければならない。ただし、作品研究は1科目4単位、原典研究は1科目4単位、特論は2科目8単位を修得しなければならない。
- (5) 合計38単位以上を修得しなければならない。

〈芸術制作専攻〉

- (1) 授業科目の履修は、研究指導教授の指導を受けて「履修時間登録表」を提出しなければならない。
- (2) 1つの研究演習科目を選択し2年間継続履修し、16単位を修得しなければならない。
- (3) 選択した研究演習と同じ研究領域の特殊研究科目2科目8単位を修得しなければならない。
- (4) 制作理論演習は1科目2単位を修得しなければならない。
- (5) 作品研究、原典研究、特論、プロジェクト研究演習、芸術文化研究の内から3科目12単位を修得しなければならない。
- (6) 合計38単位以上を修得しなければならない。

建築士試験の大学院における実務経験の認定について

建築士法の改正にともない、建築士試験の受験資格である実務経験については、大学院における建築設計に関するインターンシップを必須として、これと連携した授業科目の単位取得状況に応じて、実務経験年数として算出されることになった。具体的には、インターンシップ(14単位)およびインターンシップ関連科目(16単位)を合計して30単位以上取得することにより、実務経験2年とみなされることになる。

△ ……2021年3月31日退任予定

☆1 ……2022年3月31日退任予定

☆2 ……2023年3月31日退任予定

2020年度 芸術研究科 博士課程(前期) (参考)

履修要項一覧(両専攻共通)

芸術文化学専攻・芸術制作専攻

(この表は2020年担当教員の表であり、2021年4月からの担当ではありません。)

	科目名	配当年次	単位	担当教員
特殊研究	絵画特殊研究Ⅰ	1・2	4	○西田真人 ※森井宏青
	絵画特殊研究Ⅱ	1・2	4	いしだふみ
	彫刻特殊研究Ⅰ	1・2	4	藤木康成
	彫刻特殊研究Ⅱ	1・2	4	竹屋 修
	デザイン特殊研究Ⅰ	1・2	4	大平 弘
	デザイン特殊研究Ⅱ	1・2	4	石津 勝
	デザイン特殊研究Ⅲ	1・2	4	中川志信
	写真特殊研究	1・2	4	青山 勝
	環境特殊研究	1・2	4	福原成雄△
	建築特殊研究	1・2	4	田口雅一
	工芸特殊研究Ⅰ	1・2	4	上田順平
	工芸特殊研究Ⅱ	1・2	4	長谷川政弘
	工芸特殊研究Ⅲ	1・2	4	館 正明
	工芸特殊研究Ⅳ	1・2	4	内村由紀
	映画・映像特殊研究Ⅰ	1・2	4	荒川淳彦☆2
	映画・映像特殊研究Ⅱ	1・2	4	中川滋弘☆2
	舞台特殊研究Ⅰ	1・2	4	○倉岡智一 ※法月紀江
	舞台特殊研究Ⅱ	1・2	4	川南 恵
	舞台特殊研究Ⅲ	1・2	4	○中村康治 ※新田三郎
	文学創作特殊研究Ⅰ	1・2	4	玄 月
	演奏特殊研究Ⅰ (ピアノ奏法)	1・2	4	今川裕代
	演奏特殊研究Ⅱ (室内楽)	1・2	4	青砥 華△/水口 聡/小林沙羅
	演奏特殊研究Ⅲ (伴奏法)	1・2	4	安田紀子
	演奏特殊研究Ⅳ (演奏解釈Ⅰ)	1・2	4	○辻 浩二 ※栗山和樹
	演奏特殊研究Ⅴ (オペラ)	1・2	4	水口 聡
	演奏特殊研究Ⅵ (演奏解釈Ⅱ)	1・2	4	大友直人
	作曲特殊研究Ⅰ	1・2	4	志村 哲
	作曲特殊研究Ⅱ	1・2	4	田中久美子
作品研究	芸術学作品研究	1・2	4	片岡 淳/笹谷純雄
	文芸学作品研究	1・2	4	玉岡かおる☆1
	演劇学作品研究	1・2	4	重政隆文☆1
	音楽学作品研究	1・2	4	樋口光治☆2
	環境・建築芸術学作品研究	1・2	4	奥 佳弥
	映画・映像作品研究	1・2	4	中川滋弘☆2
原典研究	原典研究Ⅰ (英語)	1・2	4	重政隆文☆1
	原典研究Ⅱ (仏語)	1・2	4	前川陽郁
	原典研究Ⅲ (独語)	1・2	4	木村和実
	原典研究Ⅳ (伊語)	1・2	4	石井元章
	原典研究Ⅴ (古文・漢文)	1・2	4	西岡陽子☆2
特論	美学特論	1・2	4	加藤哲弘
	芸術学特論	1・2	4	長野順子△
	美術史学特論	1・2	4	石井元章/河田昌之△
	現代美術特論	1・2	4	長野順子△
	工芸・デザイン学特論	1・2	4	瀧本雅志
	情報芸術学特論	1・2	4	市川 衛
	民族芸術学特論	1・2	4	福内千絵
	映像芸術学特論	1・2	4	青山 勝
	文芸学特論	1・2	4	団野恵美子
	演劇学特論	1・2	4	出口逸平
	劇作脚本特論	1・2	4	西岡琢也
	音楽学特論	1・2	4	前川陽郁
	音楽史学特論	1・2	4	樋口光治☆2
	音楽芸術学特論	1・2	4	田之頭一知
	環境芸術学特論	1・2	4	若生謙二
	造園学特論	1・2	4	若生謙二
	建築芸術学特論	1・2	4	加治大輔
	建築史学特論	1・2	4	奥 佳弥
	環境・建築経営学特論	1・2	4	○福原成雄△ ※久保清一
	大衆芸術特論	1・2	4	青山 勝
	アニメーション特論	1・2	4	高橋良輔△
	計		28	(芸術文化学専攻)
			20	(芸術制作専攻)
				○前期担当 ※後期担当
不開講科目	文学創作特殊研究Ⅱ	1・2	4	
	生態学特論	1・2	4	
	プロジェクト研究演習	1・2	4	
	芸術文化研究	1・2	2	
	芸術行動学特論	1・2	4	
建築士試験におけるインターンシップ	建築設計研究Ⅰ	1・2	2	
	建築設計研究Ⅱ	1・2	2	
	建築設計インターンシップⅠ	1・2	2	
	建築設計インターンシップⅡ	1・2	2	
	建築設計インターンシップⅢ	1・2	2	
	建築設計インターンシップⅣ	1・2	2	
	建築設計インターンシップⅤ	1・2	2	

△ 2021年3月31日退任予定

☆1 2022年3月31日退任予定

☆2 2023年3月31日退任予定

2021年度(予定) 芸術研究科 博士課程(後期)

各科目担当者につきましては、変更する可能性があります。

履修要項一覧(研究指導担当教員)

芸術専攻 芸術文化学研究分野

研究領域	科目名	配当年次	単位	担当教員
●芸術学	芸術学研究	1	4	青山 勝／五十嵐公一／石井元章／瀧本雅志／長野順子△
		2	4	
		3	4	
●文芸学・演劇学	文芸学・演劇学研究	1	4	勝田安彦／団野恵美子／出口逸平
		2	4	
		3	4	
●音楽学	音楽学研究	1	4	長野順子△／前川陽郁
		2	4	
		3	4	
●環境・建築芸術学	環境・建築芸術学研究	1	4	加治大輔／門内輝行△
		2	4	
		3	4	
共通	相互領域研究指導	—	—	
	学位(博士)論文	—	—	
計			12	(50音順)
不開講科目	プロジェクト研究	1	4	

芸術専攻 芸術制作研究分野

研究領域	科目名	配当年次	単位	担当教員
●絵画	絵画研究	1	4	いしだふみ／泉谷淑夫☆2／横溝秀実△
		2	4	
		3	4	
●彫刻	彫刻研究	1	4	JUN TAMBA(じゅんたんば)
		2	4	
		3	4	
●デザイン(写真含む)	デザイン研究	1	4	織作峰子／高橋善丸☆2／中川志信／吉川直哉
		2	4	
		3	4	
●環境・建築	環境・建築研究	1	4	田口雅一／福原成雄△／門内輝行△
		2	4	
		3	4	
●工芸	工芸研究	1	4	三好正豊／山野 宏
		2	4	
		3	4	
●映画・映像	映画・映像研究	1	4	大森一樹☆1／西岡琢也
		2	4	
		3	4	
●舞台	舞台研究	1	4	堀内 充／山本健翔
		2	4	
		3	4	
●文学創作	文学創作研究	1	4	有吉玉青／玉岡かおる☆1
		2	4	
		3	4	
●器楽	器楽研究Ⅰ(ピアノ)	1	4	熊本マリ／仲道祐子
		2	4	
		3	4	
	器楽研究Ⅱ(管弦打)	1	4	橋爪伴之
		2	4	
		3	4	
●声楽	声楽研究	1	4	水口 聡／三原 剛
		2	4	
		3	4	
●作曲	作曲研究	1	4	高橋 裕／田中久美子
		2	4	
		3	4	
共通	制作理論研究	1・2・3	2	青山 勝／五十嵐公一／石井元章／加治大輔／勝田安彦／瀧本雅志 団野恵美子／出口逸平／前川陽郁
	相互領域研究指導	—	—	
	学位(博士)論文(研究作品含む)	—	—	
計			14	(50音順)
不開講科目	プロジェクト研究	1	4	

教育課程概要

博士課程(後期)のカリキュラムは、2つの研究分野における研究領域それぞれの研究科目を軸に編成されている。修業年限は3年。学生は各自が選択する研究科目を中心に、下記に定める履修方法にもとづいて所定の単位を修得する。研究の主体はあくまでも学生であり、必要な研究指導を受けながら自主的に研究をすすめていく。そして、博士論文(研究作品、研究上演、研究演奏を含む)の審査および最終試験に合格した者には、博士(芸術文化学)もしくは博士(芸術)の学位が授与される。

- ・芸術専攻 芸術文化学研究分野 博士(芸術文化学)
- ・芸術専攻 芸術制作研究分野 博士(芸術)

履修方法**〈芸術専攻〉**

- (1) 1つの「研究」科目を選択し3年間継続履修し、1科目12単位を修得しなければならない。
- (2) 研究指導教授が学生の研究上特に必要と認めたときは、他の「研究」科目および前期課程の授業科目の履修を認めることがある。
- (3) 芸術制作研究分野の学生は、上記の他に制作理論研究1科目2単位を修得しなければならない。
- (4) 芸術文化学研究分野は合計12単位以上、芸術制作研究分野は合計14単位以上を修得しなければならない。

△ ……2021年3月31日退任予定

☆1 ……2022年3月31日退任予定

☆2 ……2023年3月31日退任予定

Osaka
University
of Arts
Graduate School

大学院要覧

芸術研究科
博士課程[前期・後期]
芸術文化学専攻
芸術制作専攻

担当教員プロフィール

◆芸術研究科 博士課程 (指導教員)

芸術文化学専攻／芸術専攻・芸術文化学研究分野 P. 9～

芸術制作専攻／芸術専攻・芸術制作研究分野 P.11～

◆芸術研究科 博士課程 (前期)

芸術文化学専攻／芸術制作専攻共通 P. 19～

★各領域教員の研究内容を把握して自己の目指す研究が本学で出来るのか検討すること。

芸術研究科 博士課程 芸術文化学専攻/芸術専攻・芸術文化学研究分野

担当者

芸術学

青山 勝（あおやま まさる）教授

profile —— 1967年岡山県生まれ。1985年岡山県立朝日高校卒、1992年京都大学大学院文学研究科修士課程（美学美術史学専攻）修了、1998年同博士後期課程単位取得満期退学。甲南大学大学院人文科学研究科博士研究員（1998～2003年）、大阪成蹊大学助教授・教授（2003～2019年）を経て、2019年より大阪芸術大学教授、2020年より文芸学科学科長。美学会、日本映像学会、表象文化論学会等。

研究分野 —— 美学・芸術学、視覚文化論。写真、映画、現代美術等について横断的に研究を進めている。著書に、ウィリアム・ヘンリー・フォックス・ストルボット『自然の鉛筆』（編著・翻訳、赤々舎）、『写真の誘惑—視線の行方』（共著、国立国際美術館）、『デザインの力』（共著、晃洋書房）等。訳書にレイモン・ドゥバルドン『さすらい』、アントワーズ・ダガタリ抗体』（以上、共訳、赤々舎）、ポール・ヴィリリオ『自殺に向かう世界』（共訳、NTT出版）、セルジュ・ティスロン『明るい部屋の謎』（共訳、人文書院）、ジョン・A・ウォーカー／サラ・チャップリン『ヴィジュアル・カルチャー入門』（共訳、晃洋書房）等。

安藤 英由樹（あんどう ひでゆき）教授

profile —— 1974年岐阜県生まれ。1999年 愛知工業大学 電気電子工学専攻 修士号取得、博士課程中退。2001年より東京大学にて、JST「協調と制御」領域研究員、2004年に東京大学で論文博士として博士（情報理工学）授与、2004年 NTT コミュニケーション科学基礎研究所研究員、2008年 大阪大学大学院情報科学研究科准教授、2020年大阪芸術大学アートサイエンス学科教授。

研究分野 —— ヒトの感覚・知覚・運動の原理をもとにVR、AR、XRの分野を中心に錯覚利用インタフェース、医師と共同して手術追体験トレーニングシステム、Wellbeingを実現する情報技術と社会デザインなどの研究に従事。70篇以上の論文、50件以上の特許など基礎研究に加え、芸術表現としての先端的科学技術の社会貢献にも関心を寄せ、自らも作品制作を行なう。第12回文化庁メディア芸術祭優秀賞、ARS ELECTRONICA PRIZ Honorarary Mention受賞（2009、2011）等。

五十嵐 公一（いがらし こういち）教授

profile —— 愛知県生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士（文学）（東京大学）。兵庫県立歴史博物館などで学芸員として勤務。関わった展覧会には「狩野永納 その多彩なる画業」「彩 鶴澤派から応学まで」「義経 源氏・平氏・奥州藤原氏の至宝」「2014年NHK大河ドラマ 軍師官兵衛」「特別展覧会 狩野山楽・山雪」「乾山の芸術と光琳」「第90回全国高校野球選手権記念大会 夏・甲子園」などがある。現在、大阪芸術大学博物館副館長を兼務する。

研究分野 —— 専門は日本中近世絵画史。単著に『近世京都画壇のネットワーク 注文主と絵師』（吉川弘文館）、『京狩野三代生き残りの物語 山楽・山雪・永納と九条幸家』（同）、共著に『天皇の美術史4 雅の近世、花開く宮廷絵画：江戸時代前期』（同）、『天皇の美術史5 朝廷権威の復興と京都画壇：江戸時代後期』（同）、『美術出版社ライブラリー 歴史編 日本美術史』（美術出版社）、『日本美術全集 12狩野派と遊楽図』（小学館）、『原本「古画備考」のネットワーク』（思文閣出版）などがある。

石井 元章（いしい もとあき）教授

profile —— 群馬県生まれ。1983年東京大学法学部第一類、1987年東京大学文学部イタリア語イタリア文学専攻卒業。1990年イタリア政府給付留学生として渡伊。1997年東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了（文学博士）。2001年イタリア、ピサ高等師範学校大学院文哲学コース博士課程修了（文学博士）。武蔵野美術大学講師、大阪芸術大学助教授を経て現在大阪芸術大学教授。大阪大学、関西大学、立命館大学、放送大学講師。2018-2019年度ミラノ大学文学部文化・環境財学科招聘教授。

研究分野 —— ルネサンス期イタリア美術、日伊交流史、ジャポニズム研究。著書：『ヴェネツィアと日本—美術をめぐる交流』ブリュッケ 1999、『ルネサンスの彫刻 15・16世紀のイタリア』ブリュッケ 2001、2007、『Venezia e il Giappone - Studi sugli scambi culturali nella seconda metà dell'Ottocento』Istituto Nazionale di Archeologia e Storia dell'Arte, Roma 2004、『明治期のイタリア留学 文化受容と語学習得』吉川弘文館、東京2017。日本語、英語、イタリア語の論文多数。イタリアでの国際学会にも数多く参加発表。

瀧本 雅志（たきもと まさし）教授

profile —— 北海道小樽市生まれ。1982年小樽潮陵高校卒。1987年京都大学文学部（国語学国文学専攻）卒。広告会社ISS、製作会社SEDIC、「スタジオ・ボイス」編集部での映像（TV番組、CF、VP）や書籍（『電機遊戯大全』）の製作、カルチャー誌編集の仕事を経て、2001年東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻（表象文化論コース）博士後期課程単位取得満期退学。2004年から2015年まで、岡山県立大学デザイン学部（デザイン工学科／建築・都市デザイン領域）准教授。2016年より、本学に着任。

研究分野 —— 表象文化論。主にイメージ論の観点から、研究範囲は、哲学・映画・写真・絵画・建築・ファッション等へ広く及び。刊行書は、『モードと身体』、『表象のディスクール4：イメージ』、『ドゥルーズ／ガタリ』、『建築と植物』、『レム・コールハースは何を変えたのか』（以上、共著）、『デザインの小さな哲学』、『Supergraphics』、『アート×建築複合態』、『ジャック・ドゥミ 夢のルーツを探して』（以上、翻訳）等。論文は、『ベルグソンに潜する写真基礎論』、『1990年以降のファッション・イメージ』、『デザインの起源』等。

長野 順子（ながの じゅんこ）教授

profile —— 1973年桐朋学園大学音楽学部作曲理論学科（音楽学専攻）卒業、1979年東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専攻）修士課程修了、1984年同博士課程単位取得退学。東京大学文学部助手、群馬県立女子大学助教授、神戸大学大学院助教授・教授を経て、2015年より大阪芸術大学教授（大学院研究科長、図書館長）。神戸大学名誉教授。1996～97年グラスゴー大学哲学科客員研究員。美学会（委員／編集委員2001～10年）、国際美学会、日本音楽学会、日本シェリング協会（理事／編集委員2003～11年）、日仏美術学会等。

研究分野 —— 美学・芸術学、音楽美学。主な研究テーマは近・現代の美学思想（美と崇高、美と醜、美的もののジェンダー性）、劇場空間における文化の交差、音楽と身体技法等。著書・論文に『オペラのイコノロジー（魔笛：夜の女王の謎）（ありな書房）』、『交響するロマン主義』（共編著、晃洋書房）、『カントにおける自然美と芸術美』（『日本カント研究10』理想社）、『「負」の共感について—おぞましさの反美学へ』（『哲学雑誌』797号、有斐閣）、C. コースマイヤー『美学 ジェンダーの視点から』共訳、三元社）他。

文芸学・演劇学

勝田 安彦（かつた やすひこ）教授

profile —— 演出家・翻訳詞作家。1958年生。明治大学文学部演劇学専攻中退。1985年より一貫してフリーの演出家として新劇から商業演劇まで幅広く活躍。特にファンタスティックスを初めとするジョーンズ&シュミット作の一連のミュージカルはライフワークとして度々取り上げている。文化庁芸術祭賞、湯浅芳子賞受章。

研究分野 —— 主な演出作品：ジェニーの肖像、コレット・コラージュ、IDO!!IDO!!、日陰でも110度、ゲーム・オブ・ラヴ、殺しの接吻、グロリアス・ワンス、フル・サークル、メフィスト他。著書・生と死と再生の舞台～ジョーンズ&シュミットの祝祭ミュージカル、幕の開く前に～僕の演劇雑記帳～。訳書・キャバレー、ウェスト・サイド・ストーリー、我が祖国のために、ジョーンズ&シュミット ミュージカル戯曲集、恋のたわむれ、他。

団野 恵美子（だんの えみこ）教授

profile —— 神戸大学文学部文学専攻で英米文学を専攻し、1997年、神戸大学大学院文化科学研究科文化構造専攻（博士課程）修了。博士（学術）。2002年～13年、姫路獨協大学外国語学部准教授・教授。2006年～07年、ケンブリッジ大学英語学部客員研究員（Lucy Cavendish College 所属）。2013年より、大阪芸術大学芸術学部文芸学科教授。日本シェイクスピア協会、日本英文学会、関西シェイクスピア研究会、テクスト研究学会、神戸英米学会各会員。日本英文学会関西支部大会準備委員。

研究分野 —— 16世紀イギリス文学、シェイクスピアを中心とした演劇作品やエリザベス朝文化を専門とする。シェイクスピアの喜劇の構造をイコノロジーの手法を取り入れて研究している。著書に『越境する演劇』（共著、英宝社）、『テクストの地平』（共著、英宝社）、『ロンドン・スパイ—都市住民の生活探訪』（共訳、法政大学出版局）、『現代アイルランド女性作家短編集』（共訳、新水社）、『現代思想芸術事典』（共訳、青土社）、『ウィズダム英和辞典』（項目執筆・校閲、三省堂）など。

出口 逸平（でぐち いつへい）教授

profile —— 1956年大阪生まれ。

1987年神戸大学大学院文学研究科単位取得退学。

1989～98年熊本県立大学文学部講師・助教授。1995～96年オックスフォード大学客員研究員。1998年より大阪芸術大学助教授・教授。

日本演劇学会、日本近世文学学会会員。

日本演劇学会幹事、文化庁芸術祭演劇部門（関西の部）審査委員、芸術選奨選考審査員（演劇部門）、日本芸術文化振興基金演劇専門委員等をつとめる。

研究分野 —— 日本演劇・日本文学。

最近は、歌舞伎・文楽といった古典劇と近代・現代劇との関係、また近世・近代の小説作品と演劇・映画との関連に興味を持っている。

『研辰の系譜 —— 道化と悪党のあいだ』（作品社 2017年）のほか、共著『近世と近代の通廊 —— 十九世紀日本の文学』（双文社出版 2001年）、『二〇世紀の戯曲Ⅲ —— 現代戯曲の変貌』（社会評論社 2005年）など。

音楽学**長野 順子（ながの じゅんこ）教授**

P.9をご覧ください。

前川 陽郁（まえかわ はるか）教授

profile —— 1956年、香川県に生まれる。京都大学文学部卒業。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程（芸術学専攻）修了。博士（文学）。1991年より大阪芸術大学勤務。美学会、日本音楽学会、日本音楽教育学会会員。博士論文は『音楽と美的体験』（勁草書房、1995年）として公表。共訳書として、『ティーチング・プラス 一管楽器指導の新しいアプローチ』（ステーンストロプ著、作品社、2008年）など。教育関係の論文では、『知識と感情を結ぶものとしての芸術教育』（『芸術と教育』（大阪芸術大学教員養成研究論集）第1号、2017年）など。

研究分野 —— 芸術がもたらす体験について、音楽を中心に考えており、特に、芸術が人間にとってなぜ必要か、どのような存在意義を持つかを、音楽だけでなく、美術や舞踊や文学などと音楽との関わりの面からも研究している。芸術の創作、演奏・上演、鑑賞での体験は研究とは全く無関係のように思われるかもしれないが、芸術は感性だけで成り立っているわけではないため、知的な理解は芸術の実践とつながっており、また、つながっていてこそ芸術研究だということを基本姿勢にしている。その視点からの芸術教育の研究も、重要な課題である。

田之頭 一知（たのがしら かずとも）教授

profile —— 1959年京都市生まれ。早稲田大学第一文学部卒業後、出版社勤務を経て、1990年東京大学文学部美学芸術学専修課程卒業。大阪大学大学院文学研究科に進み、1995年同大学院博士後期課程を中退、大阪芸術大学大学院専任助手に着任。現在、大阪芸術大学教授。所属学会は、美学会、日本音楽学会、日本映像学会、意匠学会、広島芸術学会、文芸学研究会、The International Association for Aesthetics（国際美学会）。2007年より美学会委員、オンラインジャーナル *Aesthetics*（国際版『美学』）編集委員。なお、2009～19年、同誌の編集委員長を務めた。

研究分野 —— 美学および音楽哲学が専門分野。音楽や映画などを主に時間という観点から考察している。哲学的時間論の系譜を辿る作業も重要な研究課題。また、専門分野の研究に根ざした舞踏論やアート・プロデュース論の構築も目論んでいる。主要業績として、『美と藝術の扉——古代ギリシア、カント、そしてベルクソン——』（萌書房、2017年）、「ボエティウスにおける永遠をめぐって——永続的時間と悠久の自然の音楽——」（岡林洋・清瀬みさを編著『カルチャー・ミックスII——「文化交換」の美学応用編——』150～163頁、晃洋書房、2018年）など。

環境・建築芸術学**加治 大輔（かじ だいすけ）教授**

profile —— 一級建築士。博士（工学）。1993年 東北大学工学部建築学科卒業。1995年 東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻博士課程前期修了。1997年 東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻助手（助教）。2007年 大阪芸術大学芸術学部建築学科准教授。2015年 大阪芸術大学教授。社会活動として、東北まちづくり協議会情報委員・編集委員、Real Size Thinking デザインコンペ幹事、河南町 ESCO事業副会長。富田林市空家対策協議会会長。他。1995年日本建築学会優秀修士論文賞。2008年日本建築家協会優秀建築選。日本建築学会（AIJ）会員。日本建築家協会（JIA）会員。日本建築協会会員。

研究分野 —— 建築意匠・建築計画

査読付論文——「ダイナミックシンメトリー理論の論理について」「ミース・ファン・デル・ローエのフツベ邸とジェイ・ハンビッジの正方形分割」「ミースのファンズワース邸の平面に潜むダイナミックシンメトリー」。「現代建築のプログラム概念の普遍性と可能性」1995年。他

全国誌掲載作品——富田林市観光交流施設「きらめきファクトリー」2015年。瀬戸内国際芸術祭大芸出展作品「Swaying with Laver / 建築計画・設計」2010年。「家系図の家」2006年。他

門内 輝行（もんない てるゆき）教授

profile —— 1973年京都大学工学部建築学科卒業。1975年東京大学大学院工学系研究科修士課程修了、1977年同博士課程退学。1977年東京大学生産技術研究所助手、1989年早稲田大学理工学部助教授、1997年同教授、2004年京都大学大学院工学研究科建築学専攻教授。2016年大阪芸術大学建築学科教授、京都大学名誉教授。京都市立芸術大学客員教授。博士（工学）、一級建築士。日本建築学会理事・近畿支部長、京都市美観風致審議会会長、京都市庁舎整備懇談会座長、日本国際賞審査委員会都市計画分野審査委員等を歴任。日本建築学会賞（論文）、キッズデザイン賞（経済産業大臣賞）等を受賞。

研究分野 —— 建築・都市記号論、デザイン方法論、環境における人間の行動・認知に関する研究、生活環境のデザインとその評価に関する研究。これらの研究をもとに、複雑な人間-環境系を解読し、それを豊かな生活環境の形成に統合する理論の構築とデザイン実践を推進。著書に『記号としての芸術』、『人間-環境系のデザイン』、『もうひとつのデザイナー—その方法論を生命に学ぶ』、『建築・都市計画のための調査・分析方法』、『デザイン学概論』、『最先端の図書館づくりとは？』など。作品に、京都大学デザインイノベーション拠点、京都市立洛央小学校ブックワールドなど。

芸術研究科 博士課程 芸術制作専攻/芸術専攻・芸術制作研究分野

担当者

絵画

いしだ ふみ 客員教授

profile ——— 神戸大学卒業後銅版画を始める。兵庫教育大学大学院修了。文化庁在外研修員として渡米。その後、アメリカ、カナダ、ルクセンブルグ等で滞在制作。全関西美術展(第三席・版画賞他)、日仏現代美術展、安田火災美術財団奨励賞展、山本鼎版画大賞展(第2回大賞)、空間国際版画ビエンナーレ、中華民国国際版画ビエンナーレ、公募団体ベストセクション美術等に参加。作品は上田市立博物館、台湾国立美術館、ベルシー美術館(フランス)、コロンビア大学等に収蔵。神戸新聞にて「阪神淡路一帯日本往復書簡」の挿画を1年間担当。神戸市立小磯記念美術館との連携鑑賞実践多数。現在、春陽会・日本美術家連盟・版画学会会員。

研究分野 ——— 銅版を基調に、コラグラフ、ポリマーグラビュール、写真製版、木板等のミクストメディアで制作。

最近のテーマの一つに「間」がある。古事記や日本語の音が現代科学により読み解かれた部分に不思議を覚え、私たちが生きる地上の世界と宇宙が、また目には見えない細胞等とも相似するしくみで繋がっていることに感動したことが動機となっている。様々な技法で現れた形たちがミクロとマクロ双方の視点を内包しながら層となり、共振し合う絵画空間を目指している。

泉谷 淑夫 (いずみや よしお) 教授

profile ——— 1952年神奈川県生まれ。1983年横浜国立大学大学院教育学研究科修了。2007年岡山大学教育学部教授。2018年大阪芸術大学教授、岡山大学名誉教授。神奈川県美術展大賞、一陽展一陽賞、花の美術大賞展大賞、トリックアート大賞展大賞、岡山県美術展大賞、小磯良平大賞展優秀賞など受賞多数。特別展「月・歌会始御題によせて」(式年遷宮記念神宮美術館)、公募団体ベスト・セクション(東京都美術館)出品。八千代の丘美術館、奈良町現代美術館、池田20世紀美術館で企画展。『筒井康隆コレクション』全7巻装幀・装画。一陽会運営委員、岡山県美術展審査員。作品集「羊の惑星」「美しい驚き」。

研究分野 ——— 油絵によるヴィジュアル・ショッキング的構想表現を長年にわたり研究。シュルレアリスム、象徴主義、社会派リアリズムなどを研究対象に、発想や構図を中心に現代的な文明批評の絵画を追及している。その表現は「美術の窓」の「技法講座」でも特集され、近年は「美しい驚き」のキャッチフレーズとともに、広く認知されている。絵画制作と並行して行っている鑑賞教育の研究では、比較鑑賞を活用した対話形式の鑑賞法を確立し、講演会、放送大学、教員向け講習会等で広く社会に発信している。『美との対話』など鑑賞教育分野での著書・論文も多数有り。

久世 直幸 (くぜ なおゆき) 准教授

profile ——— 加山又造氏の京都天龍寺法堂天井画「雲龍図」制作助手を務める。創画展にて創画会賞('04、'09、'10)、春季展賞('05、'06)、中部総合美術展、第一回公募展ベストセクション展、その他個展・グループ展を多数開催。現在創画会会員・運営委員、京都日本画家協会会員。大型作品のコレクション:愛知淑徳大学、藤田医科大学、東海東京フィナンシャルホールディングス、大垣共立銀行、伊勢湾海運株式会社、豊田スタジアムなど。

研究分野 ——— 岩絵の具や和紙、墨、柿渋、天然染料、礬水など伝統的な日本画材料を使用した新しい絵画表現の研究と自己表現への応用を主な制作テーマとし、大型作品を中心にした制作発表を美術館や画廊、大学や企業のオープン・スペースにて行う。またスケッチや素描などの基礎的な描画技法の絵画表現への展開や、新素材やデジタル技術と従来の日本画材との融合にも取り組み、時代に相応しい新しい絵画表現と展示形態を目指した制作発表活動を行っています。

横溝 秀実 (よこみぞ ひでみ) 教授

profile ——— 1974年東京藝術大学美術学部油画科卒業。1976年東京藝術大学大学院美術研究科油画専攻修士課程修了。芸術学修士。1978年より大阪芸術大学専任。1989年咲くやこの花賞受賞。

「アート・ナウ '80」(兵庫県立近代美術館)、「シガ・アニュアル '86」(滋賀県立近代美術館)、「ワイズマン・コレクション展」(そごう美術館 横浜)、「絵画1977-1987」(国立国際美術館)、「横溝秀実展」(国立国際美術館)、「横溝秀実展」(ザ・コンテンポラリー・アートギャラリー 西武百貨店 東京)、「ファルマコン '90」(幕張メッセ 千葉)、「ニュー・ウェイブ 現代美術の80年代」(国立国際美術館)、その他個展、グループ展等多数。

研究分野 ——— 近・現代絵画を中心に現代アートまで。アメリカの抽象表現主義絵画を研究し、その成果を自作に生かすべく制作を続けてきたが、現在は、近代絵画からさらに古典絵画まで視野を広げ、新たな絵画の可能性に向けて研究、制作を続けている。

彫刻

JUN TAMBA (じゅんたんば) 客員教授
(塚脇 淳)

profile ——— 1952年京都府南丹市生まれ。1977年京都市立芸術大学彫刻科卒業、1979年京都市立芸術大学彫刻専攻科修了、1980年神戸大学教育学部に奉職。現在、神戸大学名誉教授、淡路島IKUHART企画代表、タンバタンボフ交流協会理事、NEW HEAVY代表。1983年第5回エンバ賞美術展優秀賞、1986年第1回三田彫刻コンペティション大賞、1987年第3回本郷新賞、1997年兵庫県芸術奨励賞、2015年作家名をJUN TAMBA(本名塚脇淳)とし、活動を始める。鉄を素材に構成的抽象彫刻を追求し続ける。近年は制作プロセスを重視する公開制作や彫刻シンポジウム、アートワークショップなどに力点を移し、ロシアなど海外での表現活動が顕著。

研究分野 ——— 立体造形制作研究、空間彫刻制作研究、20世紀美術論、抽象美術論、構成主義美術論。

とりわけ鉄を素材として彫刻を作り続けてきた。人は私のことを鉄の彫刻家というが、私自身は空間の彫刻家であると自負している。空間を現すためには鉄が一番都合のよい素材であったからに過ぎない。

しかし今や、絵画や平面にも「空間」を感じるようになって、いったい私はどこへ向かうのか判らない。けれども楽しくてとてもワクワクしている。丹

竹屋 修 (たけや おさむ) 教授

profile ——— 1983年 愛知県立芸術大学美術学部彫刻専攻卒業。1990年 日本現在彫展金賞(98年 同賞)。1991年 神戸具象彫刻大賞特別優秀賞(93年 同賞)。1992年 ロダン大賞展上野の森美術館賞。1993年 長野市野外彫刻賞。1995年 木内克大賞野外彫刻展茨城県立近代美術館賞。1998年 安田火災美術財団奨励賞展新作優秀賞。文化庁現代美術選抜展。公益社団法人二科会を中心として、特選・二科賞・ローマ賞を経て会員推挙。2016年 文部科学大臣賞。個展・企画展等で発表。

研究分野 ——— テラコッタ技法による人体をモチーフとした具象彫刻の可能性を追求。炎の力を得て作品が完結する陶彫による表現が、立体表現といかに関わるのかを模索している。強い意志力の持続と質の高い造形性のたゆまない研究の中で、素材・技法と出会う機会が訪れる。技法の獲得が制作展開の大きなポイントであり、黙して動くことのない量塊の中に永い時間性を獲得することが彫刻表現の一つの完成形であると考えている。

デザイン(写真含む)

織作 峰子（おりさく みねこ）教授

profile —— 石川県生まれ。1982年 ミス・ユニバース日本代表に選出。大竹省二写真スタジオ入門。1987年 独立。2000年 ウォーターフォードウエッジウッドライフスタイルアワード受賞。2007年 パリにて写真展「DIMENSIONS」「SAKURA」。2009年 金沢21世紀美術館にて「DIMENSIONS」。日本ハンガリー国交樹立140周年記念招待作家としてブタペストMAIMANO HOUSE写真博物館にて「時」。日本や世界各地で写真展を開催。

日本広告写真家協会理事／日本写真芸術学会評議員／花王芸術・科学財団評議員

研究分野 —— 「桜」日本各地の桜の木に宿る、女性性の表現。
「ディメンションズ」多次元を花の形を借りて表現。既にA1型大型写真集を発売しているが、モチーフである植物を純金箔、プラチナ箔にプリントする手法を考案し、写真のアーカイブ研究を始める。またアクリル素材に写真をプリントし立体に重ねる新しい表現を発表し、写真のアート性を探る。
「ウィリアム・モリス」の足跡を辿る旅。写真を掲載(株式会社求龍堂)、(株)梧桐書院。

高橋 善丸（たかはし よしまる）教授

profile —— 大阪芸術大学卒業。主な著書に、「曖昧なコミュニケーション」ハンブルク美術工芸博物館、「ここちいい文字」バイ・インターナショナル、「情感のあるタイポグラフィ」DNP 文化振興財団、「高橋善丸設計世界」広西出版、他がある。主な受賞に、ニューヨークADC 銀賞、特別賞、ニューヨークフェスティバル銅賞、香港デザインアワード銀賞、アジアグラフィックアワード 審査員賞、他入賞多数。株式会社広告丸主宰。日本タイポグラフィ協会理事長、JAGDA、東京TDC、ニューヨークTDC 各会員。www.kokokumaru.com

研究分野 —— グラフィックデザインはそれ自体、時代を語る文化であるということ。表現の礎に、湿度ある視覚コミュニケーション表現を探究している。特に文字デザインに拘り、ブランディングからブックデザインまでタイポグラフィを主軸としたデザインを研究し、アジアから欧米までの大学や美術館での、講演、審査員、企画展等に多く取り組んでいる。また、トヤマ、ワルシャワ、ラハティ、ブルノー、コロラド、ユネスコ、中国、香港、等デザインのビエンナーレやトリエンナーレ等でも作品を発表し、多くの美術館で作品がコレクションされている。

中川 志信（なかがわ しのぶ）教授

profile —— 1990 松下電器産業株式会社デザイン部入社(現 パナソニック株式会社) 製品のデザイン開発、新製品企画(デジタル機器から掃除機など)。2007 大阪芸術大学芸術学部デザイン学科プロダクトデザインコース准教授→教授。2017 同大学アートサイエンス学科教授

学歴 1990 武蔵野美術大学造形学部基礎デザイン学科卒業。2016 三重大学 大学院 地域イノベーション/学術研究科 博士後期課程修了、博士(学術)取得。

受賞歴 優秀論文賞 IWRIS2015

著書「ロボティクスデザイン」 国際デザインコンペ2006 銀賞/銅賞、他受賞多数
日本グッドデザイン賞入賞 多数(NV-GS70 デジタルビデオカメラ、他)

研究分野 —— プロダクトデザイン ロボティクスデザイン
日本学術振興会 領域開拓プログラム(課題番号:AS251Z00297P)平成29~32年度。日本の伝統芸能の技能やコンテンツを先端ロボット産業に活かすUXデザイン研究。科学研究補助費
基盤研究 A(課題番号: 16H01804) 平成28~32年度。伝統芸能文楽の技をヒューマンインタラクション技術へ適応させるデザイン研究
基盤研究 B(課題番号: 25282007) 平成25~27年度
人間共存型ロボットに最適な演技演出デザイン基本法則の抽出
博士(学術)論文 ロボティクスデザインにおける感情創造の研究:認知症高齢者に対する顔自動情動生成映像によるロボット療法の効果 甲学術第1788号 三重大学

吉川 直哉（よしかわ なおや）教授

profile —— 1980年大阪芸術大学写真学科卒、1996年大学院芸術文化研究科前期修了、芸術文化学修士。2000年国際写真会議招聘(ボズナン美術大学)。2000~01年文化庁派遣芸術家在外研修/ニューヨーク・サウスハンプトン大学美術メディア学部客員研究員。2003年延辺大学客員教授(中国)。2004年チビテラ・ラニエリ財団選考アーティスト・イン・レジデンス(イタリア)。2012年カサブランカ・ビエンナーレ(モロッコ)。秋吉台国際芸術家村アーティスト・イン・レジデンス2015(山口)。テグ写真ビエンナーレ2016芸術監督(韓国)。2017年大理国際写真祭(中国)、平遥国際写真祭(中国)、ラビリス芸術祭(ドイツ・ポーランド)、2018年国際写真プロジェクトZED、延辺国際写真文化週間(中国)など招待。ヘルシンキ写真祭2020(フィンランド)審査員。国内外で展覧会、芸術祭、ワークショップなど多数。尼崎市A-labアドバイザー委嘱、日本広告写真家協会学術会員。日本写真芸術学会、日本写真協会、日本映像学会会員。

研究分野 —— 現代写真、写真芸術。写真展、国際交流、ワークショップ、写真祭などの企画、参画を通して、写真教育、写真文化についてフィールドワーク及び研究。また、学会誌、紀要、年鑑、専門誌、新聞などに寄稿。

環境・建築

久保 清一（くぼ せいいち）教授

profile —— 1977年大阪芸術大学建築学科卒業。1981年ミラノ工科大学建築学部AC修了後、V・グレンゴッティ事務所勤務。1984年アルキービ総合計画事務所設立。1996年大阪府知事賞、1999年アルカシア賞ゴールドメダル(アジア)、2000年AWD賞メリットアワード(アメリカ)、全国木材組合連合会会長賞、JID 賞、2001年第16回日本建築士会連合会賞、第11回賞賛経済産業大臣賞、グッドデザイン賞、2002年日本建築学会作品選集、2005年第6回JIA 環境建築賞、2006年JIA 優秀建築選、2010年大阪都市景観建築賞、2017年日事連建築賞奨励賞、他受賞多数。

研究分野 —— 建築設計、建築装飾論、職能論。論文「日本の大学の建築家教育の現状とUIA 建築家資格制度の調査について」(旧建設省/建技助成研究)。第24回世界建築会議学術プログラム採択、建築デザイン発表「永元寺無坐離庵の設計」(UIA 2011東京)

作品—蜜柑花の家、白景荘、大阪弁天町アトーレ、MAYUMIYAの工房、K コート、大阪府営和泉寺田住宅、永元寺、運潮寺納骨堂、道の駅かなん、富田林市宮若松住宅、守口東部コミュニティ拠点施設等の設計。学協会、新聞・雑誌各誌にて論文発表、講演会を行う。

田口 雅一（たぐち まさいち）教授

profile —— 1986年 神戸大学大学院工学研究科建築学専攻修了。工学修士。戸田建設、アスコラル構造研究所を経て、1995年 タック建築設計設立。1997年Tac-D建築構造事務所に改組、2002年よりTAPS建築構造計画事務所に改称。2005年 大阪芸術大学通信教育部専任講師。2008年より同芸術学部准教授。2015年 同教授。2011~2015年 関西大学非常勤講師。2011~2012年 大阪工業大学非常勤講師、一級建築士、構造設計一級建築士、一級建築施工管理技士、コンクリート技師、日本住宅性能評価員。

研究分野 —— 建築構造計画・建築構造設計。間伐材耐力壁の研究他。
クローバーハウス(日本建築家協会賞、第53回大阪建築コンクール 大阪府知事賞、平成19年日本建築士会連合会賞 優秀賞)、Sg(東京建築士会 住宅建築賞、グッドデザイン賞2009)、田園オフィス(グッドデザイン賞2012)、第45回中部建築賞(2013年JCDデザインアワードBEST100)、日本圧着端子製造株式会社大阪本社ビル(日本建築美術工芸協会「芦原義信賞」、第17回木材活用コンクール「林野庁長官賞」、第59回大阪建築コンクール「大阪府知事賞」、兵庫県太子町新庁舎(平成29年 日本建築家協会 優秀建築賞、平成30年 日本建築学会 作品選奨)、川上村木匠塾(平成30年 ウッドデザイン賞、令和元年 日本建築学会 教育賞)他多数。

福原 成雄（ふくはら まさお）教授

profile —— 2004年より大阪芸術大学芸術学部環境デザイン学科（現在建築学科）・大学院芸術制作研究分野環境・建築領域教授。主な著書「世界で造る日本の庭園」光村推古書院 2020年／『日本庭園を世界で作る』学芸出版 2007年。受賞および社会活動／2001年 チェルシーフラワーショー出展日本庭園 金賞・最優秀賞。2003年世界に向けた日本庭園技術・芸術の情報発信への貢献 平成14年度日本造園学会特別賞受賞。2010年5月 メルボルン市/ISS 研究所国際フェローシップ受賞。2014年～大阪府文化財保護審議会委員（2018年から副会長）。2019年～岸和田市文化財保護審議会委員。

研究分野 —— 専門分野は造園学、国内外の文化財庭園調査、修復、復元。2014年～2016年大阪府下における名勝庭園についての調査研究。2016年～2018年大阪鶴見緑地内「こどもホスピス創造広場」における創作活動、芸術療法の可能性に関する研究。2014年～英国コーデン城日本庭園復元工事設計・施工管理。2017年～イタリア・ローマ日本文化会館日本庭園修景計画。2018年～2019年～「コーデン城日本庭園四季の文化交流公演展示」2018・2019年度日本万国博覧会記念基金助成金。

門内 輝行（もんない てるゆき）教授

P.10をご覧ください。

工芸**小野山 和代（おのやま かずよ）教授**

profile —— 大阪芸術大学芸術学部工芸学科染織卒業。民族芸術学会、意匠学会、テキスタイルデザイン協会会員。受賞歴等：1988工芸都市高岡クラフトコンペティション（グランプリ）、1993国際掌中新立体造形公募展（準大賞）、1998第9回国際タビスリー・トリエンナーレ、2011～15 FIBER FUTURES Japan's Textile Pioneers、2013「八重の桜」タイトルバックに作品起用、2009～2019テキスタイルアート・ミニチュール展、2016国際繊維芸術双年展招待作家展・審査員（2002～2017年審査員）、2017伊丹市立工芸センター個展、2019伊丹ジュエリー審査員。

研究分野 —— 一布にひそむ表情をひきだすという制作意図のもと創作活動を国内外で展開。既成の織布を用いて皺や襞、布の重なりを効果的に生かす作品を制作。主な研究として「現代染織造形の動向」「Basketry」「Small Works」「Interlacing」「Shaping cloth」「袷染考」「Artwear」など、テキスタイルアートの表現手段として「CONSTRUCTED TEXTILES（構成テキスタイルの意）」の体系的な研究を制作とともに続ける。

田嶋 悦子（たしま えつこ）教授

profile —— 1981年大阪芸術大学工芸学科陶芸専攻卒業。1992年咲くやこの花賞・美術部門。2004年。第15回タカシマヤ美術賞、2004年日本陶磁協会賞受賞。現在、IAC、東洋陶磁学会、日本陶磁協会会員。大原美術館、金沢21世紀美術館、滋賀県立陶芸の森、東京国立近代美術館、岐阜県現代陶芸美術館、高松市美術館、兵庫陶芸美術館、茨城県陶芸美術館、富山市ガラス美術館、Taipei County Yingge Ceramics Museum（台湾）、Chazen Museum of Art、Asian Art Museum - San Francisco（アメリカ）に収蔵作品。

研究分野 —— 現代における陶芸表現の研究。展覧会にて作品発表を行う。1987年土と炎展・岐阜県立美術館。1993年現代の陶芸・愛知県立美術館。1996年若き陶芸家の騎手たち・愛知県立美術館。2002年現代日本工芸展（マレーシア・インドネシア）。現代陶芸100年展・岐阜県現代陶芸美術館。2003年現代陶芸の華・茨城県陶芸美術館。2004年非常のオブジェ展・東京国立近代美術館工芸館、田嶋悦子展・大原美術館有隣荘、2007年日本現代工芸展（デンマーク）。TIWAN Ceramic Biennale「KORERO展」（台湾）。2012年ソニエリユミール展・金沢21世紀美術館。2013年Flowers 田嶋悦子展・兵庫陶芸美術館。2017年Records田嶋悦子展・西宮市大谷記念美術館。

三好 正豊（みよし まさとよ）客員教授

profile —— 1970年大阪市立工芸高校金属工芸科卒業

1974年田中秀明氏に師事、千家十職「中川浄益」

茶道具制作に従事。1997年大阪にて独立。1999年46回日本伝統工芸展「文部科学大臣賞」（文化庁蔵）、2001年48回日本伝統工芸展「東京都知事賞」（文化庁蔵）、2003年大阪芸術大学非常勤講師。2006年紫綬褒章受章・大阪芸術大学客員教授。2012年～2016年公益社団法人日本工芸会理事・近畿支部幹事長、2015年～金工部会副会長。2014年大阪府指定無形文化財「鍛金」認定。

研究分野 —— 金属工芸、鍛金の伝統技法の研究及び再現、伝承。打ち上・打ち延技法、湯床吹き技法、東南アジアにおける高錫銅合金の熱間鍛造技法。2001年文化庁派遣芸術家在外派遣員（1年）としてミャンマーで高錫銅合金の研修に赴く。

山野 宏（やまの ひろし）教授

profile —— 1981年 中央大学文学部史学科卒業、1982年 カリフォルニア単科美術工芸大学留学、1989年 ロチェスター工科大学大学院美術学部修士課程修了（MFA）、1998年 金津創作の森ガラス工房エズラガラススタジオ設立、2003年 大阪芸術大学助教授、2006年 大阪芸術大学教授、1991年世界最高峰のガラス工芸大賞「ラコウ大賞」受賞、コーニングガラス美術館、クライスラー美術館、ヘンリーフォード美術館など多数の美術館に作品収蔵、アメリカ、日本を中心に展覧会、レクチャー、デモ、講義などを国際的に行う。

研究分野 —— ガラス工芸、吹きガラス技法を中心に作品制作。

映画・映像**大森 一樹（おおもり かずき）教授**

profile —— 1952年大阪市生、京都府立医大卒。高校時代から8ミリ映画を撮り始め、1977年、シナリオ「オレンジロード急行」で神戸賞受賞、翌年同映画化で劇場映画監督デビュー。以後、「ヒポクラテスたち」（80）、「風の歌を聴け」（81）、「恋する女たち」「トットチャンネル」（86・文部省芸術選奨新人賞受賞）。89年からゴジラシリーズ、「ゴジラVSビオランテ」「ゴジラVSキングギドラ」日本ベトナム合作「ベトナムの風に吹かれて」（15）など30本の作品がある。日本映画監督協会理事。

研究分野 —— 大学院での映画・映像制作研究は、学部のような大人数が各パートを受け持つ制作する一般的な劇映画の作り方は不向きであり、そのようなスタイルはとらない。大学院では教員と学生が一对一で基本的に週一度顔を合わせるといった枠の中で、どういう映画の学習教育が可能であるかを考える。その一つは設計図であるシナリオの完成度と、そこから見えてくる映画の全体像の考察と検討である。それに2年を費やすことは十分と考える。

長岡 野亜（ながおか のあ）客員准教授

profile —— 京都生まれ。立命館大学文学部英米文学専攻卒業。2001年に映画監督・原一男氏が主宰する「CINEMA塾」に参加しドキュメンタリー映画を作り始める。『ほんがら』（2008）：第14回平和・協同ジャーナリスト基金・審査委員特別賞（新人賞）、「イメージフォーラム・フェスティバル2009」観客賞受賞。『結い魂』（2011）：「2011 文化で滋養を元気に!賞」地域映画文化賞受賞。2006年から各地でドキュメンタリー映像制作講座等の映像プロジェクトを実施し、2014年から「おうち映像ラボ」代表。

研究分野 —— ドキュメンタリー映画。主なドキュメンタリー映画作品『かけがえの前進』（2002）監督：「山形国際ドキュメンタリー映画祭2003」、ドイツ日本映画祭「Nippon Connection」（2004）等上映。『はじまりの風景』（2005）監督：「東京国際レズビアン&ゲイ映画祭 2006」上映。『ほんがら』（2008）監督：「山形国際ドキュメンタリー映画祭2009」、「イメージフォーラム・フェスティバル2009」等上映。『結い魂』（2011）監督：「ニッポン国VS泉南石綿村」（2018）撮影：釜山国際映画祭、東京フィルムメックス等上映。『水俣曼荼羅』（2020）撮影・プロデューサー：国際映画祭出品予定。

西岡 琢也（にしおか たくや）教授

profile —— 1956年京都生まれ。関西大学法学部法律学科卒業。大学在学中より、井筒和幸監督の助監督。1979年、脚本家デビュー。2005年から15年まで、協同組合日本シナリオ作家協会理事長。

研究分野 —— 劇映画脚本、テレビドラマ脚本。主な映画作品「ガキ帝国」「TATTOO(刺青)あり」「ジョンベン・ライダー」「人魚伝説」「はいからさんが通る」「金田一少年の事件簿(アニメ)」「陽はまた昇る」「沈まぬ太陽」「太平洋の奇跡」「はやぶさ～遙かなる帰還」ほか多数。主なテレビ作品「京都送宮案内」「京都地検の女」「新しい朝が来た～八月十五日のラジオ体操」「鬼太郎が見た玉砕」「返還交渉人」ほか2時間ドラマ多数。

舞台

内藤 裕敬（ないとう ひろのり）教授

profile —— 大阪芸術大学(舞台芸術学科)で秋浜悟史教授(劇作家・演出家)に師事。1980年、南河内万歳一座を旗揚げ。以降、全作品の作・演出を手がける。テアトロ・イン・キャンピング戯曲賞、大阪市咲くやこの花賞、府民劇場奨励賞、OMS戯曲賞大賞、読売演劇大賞・優秀演出家賞、尼崎市市民芸術賞、文化庁芸術祭・優秀賞、等々を受賞。世界的ピアニスト・仲道郁代企画の異色コンサートを全国・海外ツアーでの構成・演出。著作に「内藤裕敬／劇風録其の壱(内藤裕敬・処女戯曲集)」『青木さん家の奥さん』がある。

研究分野 —— ①モチーフを遊ぶ作劇作法。②即興的演技のイメージ開発と発見。その先の劇的可能性について。③演出論と演技論を応用した芸術ワークショップの教育現場への発表とそのデザイン。④全国各地の公共ホールが、地域・文化・教育・観光・歴史、等々に対し拠点となった事業を展開する為の施設作り、人員育成、コミュニティへのプレゼンテーション等。演劇必要性と可能性の模索。⑤俳優育成の論理的な基礎教育のあり方について。⑦芸術とコミュニケーション、芸術と未来への関わり。芸術と生活の関わり。それらの具体的実践について。

堀内 充（ほりうち じゅう）教授

profile —— 1981年 モスクワ国際バレエコンクール銅賞。1983年 ローザンヌ国際バレエコンクール・ローザンヌ賞等1位受賞、ニューヨーク・スクール・オブ・アメリカンバレエに留学。帰国後、自ら結成したFoot lishts Dancers、堀内充バレエプロジェクト公演を行っている。青 場バレエフェスティバル、新国立劇場バレエ団等さまざまなバレエ・舞踊公演に出演。振付家として作品を多数発表。アメリカ、フランス、南米、韓国、中国に招かれている。2013年 舞踊批評家協会賞受賞。大阪芸術大学教授、芸術文化振興基金舞踊専門委員、新国立劇場事業委員。

研究分野 —— バレエ・古典、現代にまたがる演出・振付。モダンダンス、舞踊における創作表現の研究。またバレエダンサー、舞踊家における舞踊表現、テクニックの理論と実践。

これまでの演出・振付作品「バレエの情景」「アルルの女」「ロミオとジュリエット」「カルメン」「白鳥の湖」「ジゼル」「真夏の夜の夢」「ジャズコンチェルト」「バリジエンヌのよ

山本 健翔（やまもと けんしょう）教授

profile —— 1980年早稲田大学政治経済学部政治学科卒業。在学中に劇作家・岸田理生氏らと哥以劇場結成。1982年から2017年3月まで演劇集団円会員。坂東玉三郎氏より多くを学ぶ。1988年ニューヨーク・テレー・シュライバー・スタジオで研修、スタジオ公演にも参加。帰国後、演出、翻訳、劇作、俳優、声優として多くの作品に関わる他、数々のワークショップ、演劇授業等を担当。著作「フレッド・アステア」「俳優になるには」「声優になるには」等。

研究分野 —— if words be made of breath, And breath of life, (言葉が息から出来ていて、息が命から出るものなら)という、シェイクスピアの台詞にもある、呼吸と感情の関わりから生み出される言葉、さらに生み出す身体を追求。それを詩的身体と名付け、「詩」とは何かということ、詩人、劇詩人の仕事から学ぶとともに、詩の身体化を試みた上に、「詩」の交響する劇場を志す。岸田理生作「永遠 彼女と彼」、加藤道夫作「檣樓と宝石」「なよたけ」等を演出。廃屋のチェーフシリーズ「かもめ」「三人姉妹」「ワーニャおじさん」「櫻の園」台本、演出、美術、出演。

文学創作

有吉 玉青（ありよし たまお）教授

profile —— 作家。早稲田大学哲学科、東京大学美学芸術学科卒。東京大学大学院在学中に上梓した『身がわり』により、1990年、坪田譲治文学賞受賞。1992年、ニューヨーク大学大学院演劇学科修了。帰国後、執筆活動に専念。著書はほかに『ニューヨーク空間』『ねむい幸福』『キャベツの新生活』『雛を包む』『月とシャンパン』『恋するフェルメール』『美しき一日の終わり』など多数。舞台作品に日本舞踊劇「オルフェの詩」、長唄「伊勢の旅」がある。映画評をはじめ、演劇と美術、伝統工芸についての文章活動も行う。美学会会員。

研究分野 —— 日々の出来事、見聞することのすべてが小説やエッセイのテーマになりうる。問題を考えていく、その道程を正しい言葉と文章で表現していきたい。芸術全般、特に古代ギリシャから現代に至る西洋演劇史、ミュージカル、17世紀オランダ美術、近代以降の日本美術に関心を持ち、近年では舞台表現も追究している。

玉岡 かおる（たまおか かおる）教授

profile —— 作家。神戸女学院大学卒業。神戸文学賞受賞作『夢食い魚のブルー・グッドバイ』（新潮社）で'89年文壇デビュー。山本周五郎賞候補作『をんな紋』3部作（角川書店）をはじめ、新作小説を年1冊のペースで出版中。舞台化、TVドラマ化された『お家さん』（新潮社）で第25回織田作之助賞受賞。著書多数の中、最新刊は『姫君の賦 ～千姫流～』（PHP研究所）。雑誌、新聞にエッセイを多数連載中のほか、'19より長編小説『春いちばん』の連載も開始。執筆のかたわら、兵庫県教育委員、大阪市博物館紀行理事など行政での職務も勤める。

研究分野 —— 人文一般。フィールドは広く、古代史を題材にとった「天平の女帝孝謙称徳」（新潮社）、戦国時代を描いた『虹つどうべし』（幻冬舎）、この国の神仏に着眼した紀行『にっぽん聖地巡拝の旅』（大法輪閣）、近代を押し上げた先人に迫った『天涯の船』『銀のみち一条』『負けんとき』（いずれも新潮社）、美術や画家にテーマをとった『ひこばえに咲く』（PHP研究所）。現代ビジネスに着眼した『ウエディングドレス』（幻冬舎）など、それぞれの作品でとらえたテーマも深い。

器楽

浅川 和宏（あさかわ かずひろ）客員教授

profile —— 東京藝術大学音楽学部器楽科卒業、ノースウエスタン大学音楽学部大学院修士課程修了。Civic Orchestra of Chicago、メキシコ・グアナフアト州立パチオフィルハーモニー管弦楽団の首席奏者を務めたのち、1989年より大阪フィルハーモニー交響楽団の第1オーボエ奏者。NHK-FM、WFMT-Chicago等の放送に出演。日本音楽コンクール・オーボエ部門の審査員を4度務める。2008年 大栗裕作曲「オーボエとオーケストラのためのバラード」を円光寺雅彦指揮大阪フィルで日本初演。またモーツァルトのオーボエ協奏曲を1997年沼尻竜典指揮、2012年 延原武春指揮大阪フィルで演奏。2016年、浅川和宏オーボエリサイタル「イギリス・ドイツ作品集」のCDを発表。

研究分野 —— オーケストラ、室内楽及びソロ作品におけるオーボエのパートを、作品の時代様式をふまえた上で現代にふさわしい演奏として体現する研究を包括的に行っている。また、それに付随して必要な演奏テクニックを獲得するための方法論もあわせて探求する。これらの研究を、実際の公開演奏という高度に実践的な場で行うことにより、多大な音楽的成果をあげることを目的とする。さらに、今まで「職人的な勘」に頼って行われてきたリード制作の行程の中で、可能な部分をできる限り定量化するべく、データの集積を行っている。

今川 裕代（いまがわ ひろよ）准教授

profile —— 福岡県出身。シュトゥットガルト国立音楽大学及び、ザルツブルク・モーツァルテウム国立音楽大学修士課程首席修了。サレルノ国際ピアノコンクール第1位併せて最優秀デビュー演奏賞、シュベルト国際ピアノコンクール第2位、ブラームス国際音楽コンクール第2位、ルビンシュタイン国際ピアノコンクール第3位。オーストリア政府よりヴェルディグング賞受賞。2015年大阪芸術大学演奏学科客員准教授、2017年より大阪芸術大学演奏学科准教授、東京音楽大学指揮科特別アドヴァイザーを務める。

研究分野 —— 音楽的なイメージを表現していく上で必要な多彩な音色の作り方、身体の使い方に着目し、感覚と意識を技術に結び付ける為の方法を研究している。各時代様式に合った楽曲解釈、演奏スタイルを踏まえた上で、各々の感性を発揮した演奏表現ができるよう、様々な表現方法を探求し、練習・演奏・指導に活かす指導を行っている。NHK響、東京フィル、新日本フィル、関西フィル、名古屋フィル、アンサンブル金沢、チェコ国立ブルノフィル、ドルトムントフィル、レニングラード国立歌劇場管等のオーケストラ共演、ソロ、室内楽、リート伴奏をはじめ、アウトリーチ活動や、クラシック音楽と現代のビジネスの融合をテーマにした活動を展開している。

漆原 啓子（うるしはら けいこ）客員教授

profile —— 1981年東京藝術大学附属高等学校在学中、第8回ヴィニアフスキ国際コンクールに於いて、優勝と6つの副賞を受賞。翌年、東京藝術大学入学と同時に、本格的演奏活動を開始。1985年、ハレー・ストリング・カルテットの第1ヴァイオリンとして、民音室内楽コンクール優勝、斉藤秀雄賞受賞。

今までに西岡育子、阿部靖、東儀祐二、鷺見三郎、海野義雄、堀正文の各氏に師事。現在、国立音楽大学客員教授、桐朋学園大学音楽学部特任教授。

研究分野 —— ヴァイオリンの奏法、及び楽曲解釈。2009年～2011年 ベートーヴェンヴァイオリンソナタ全曲リリース。2011年 無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ全曲リリース。2014年 文化庁芸術祭レコード部門優秀賞を妹朝子との録音「無伴奏ヴァイオリン・デュオ」にて受賞。2017年 モーツァルトヴァイオリンソナタ全曲リリース。2017年文化庁芸術祭レコード部門優秀賞受賞。器楽奏者には忘れがちな、演奏をする時の呼吸の大切さを感じています。又、幅広く表現するために必要な身体の使い方を研究しています。

大野 かおる（おおの かおる）客員教授

profile —— 東京藝術大学音楽学部付属音楽高校、同大学を経て東京藝術大学大学院修士課程修了。ターティス国際ヴァイオリンコンクールにて2つの特別賞を、東京国際音楽コンクール「室内楽」では第一位入賞、並びに特別賞を受賞する。2004年の日本音楽コンクールでは本選会での共演に対し審査員特別賞が贈られる。室内楽の分野を中心に国内外で活躍。アンサンブル of トウキョウでは創立以来30年以上ソロヴァイオリン奏者として、またカルテットブラチナムメンバーとしても活躍する。東京藝術大学、東京音楽大学などで後進の指導にもあたる。

研究分野 —— ヴィオラの独奏はもとより、この楽器の魅力を最も発揮する弦楽四重奏や様々な編成の室内楽に数多く取り組む。東京を中心に活躍。リサイタル活動、カルテットブラチナムなどでの弦楽四重奏の活動、アンサンブル of トウキョウとしての活動、オーケストラ客演首席奏者としての出演、国内外の音楽祭への出演、CD録音など多方面で活躍する。またヴァイオリン奏法を身体の使い方、呼吸法など多方面から研究する。バロックから現代に至るまでの作品を、様式感を持って再現できるよう研究を重ねる。

小川 哲生（おがわ てつお）客員教授

profile —— 大阪音楽大学卒業。同大学研究員を経て大阪フィルハーモニー交響楽団入団。留学の為同楽団退団。旧西ドイツ国立北西ドイツアカデミー・デットモルト卒業。クラリネット奏者としてリサイタル、室内楽コンサートの開催、音楽講座の講師、各種コンクール審査員、専門大学や専門課程の指導者として後進の育成等、多岐に亘る活動が続いている。日本吹奏楽指導者協会特別表彰、及川記念芸術奨励賞、兵庫県功労者表彰（文化功労）、神戸市文化賞等を受賞。“クラリネット・アンサンブル”（自身による編曲が多い）など、「室内楽」の分野を実際の演奏体験を伴いながら深く研究。

研究分野 —— 木管楽器としてのクラリネットの奏法、及びその誕生から現代に至る進化・発展の歴史を考察。独奏楽器として、さらには室内楽、オーケストラ、吹奏楽、ジャズ、民族音楽等、クラリネットが活躍する場・世界は幅広く、それぞれにおける歴史、楽曲、演奏法について研究。中でも声楽や弦楽器とのアンサンブル、一世を風靡した2管編成による「ハルモニウムジーク」、そして同族楽器による「クラリネット・アンサンブル」（自身による編曲が多い）など、「室内楽」の分野を実際の演奏体験を伴いながら深く研究。

小倉 貞行（おぐら さだゆき）非常勤講師

profile —— 東京藝術大学音楽学部卒業。1979年渡米、カリフォルニア芸術大学・大学院修了。ロジャー・ボボ氏に師事する。1981年オーケランド交響楽団に首席テューバ奏者として入団。1987年帰国、2017年まで東京佼成ウインドオーケストラ奏者を務める。フィルハーモニア・プラス・クインテットテューバ奏者。洗足学園音楽大学講師。

研究分野 —— テューバ及び金管楽器の奏法を西洋人と東洋人の力の使い方の違いから研究している。農耕民族である東洋人が体の内側に向かって力を使うのに対し、狩猟民族である西洋人は外に向かって力を解放する。これはのこぎりや鉈の刃の向きによって証明される。またスポーツの中でも特に球技はほとんどが西洋のスポーツで、力を外向きに使う特徴がある。東洋人が西洋のスポーツや楽器を演奏する場合は当然西洋人の力の使い方を学ぶ必要があり、それを習得することで金管楽器をホールに豊かに響かせるような音色を出すことができる。

小田 桐 寛之（おだぎり ひろゆき）客員教授

profile —— 1979年、洗足学園音楽大学卒業と同時に東京プラスアンサンプルに入団。1982年、東京トロンボーン四重奏団結成。1986年、東京都交響楽団に首席トロンボーン奏者として入団。各地で行われる音楽祭などでも首席奏者として多数参加。現在、東京都交響楽団首席トロンボーン奏者、日本トロンボーン協会会長。大阪芸術大学大学院客員教授、洗足学園音楽大学教授、国立音楽大学客員教授、昭和音楽大学客員教授、名古屋音楽大学客員教授、大谷大学芸術学部音楽科客員教授、常葉大学短期大学音楽科客員教授。

研究分野 —— オークストラの他にソロ、室内楽でのコンサートなど精力的に活動。全国で行われている音楽祭に首席奏者として数多く参加。アレンジにも力を注ぎ、アカデミアよりトロンボーンカルテット、金管五重奏などの楽譜を数多く出版。現在までに、8枚のソロCD、10枚のトロンボーンカルテットCD、数多くの金管五重奏CDやピアノトリオ、金管三重奏などのCDもリリース。自分のモデルのマウスピースを数種類発売。

神田 寛明（かんだ ひろあき）客員教授

profile —— NHK交響楽団首席フルート奏者、桐朋学園大学教授

1991年第5回日本フルートコンベンションコンクールおよび第8回日本管打楽器コンクールにおいて第1位。1992年ソウルにおいてA.ジョリヴェのフルート協奏曲を韓国初演。1993年東京藝術大学卒業。1995年より1年間ウィーン国立音楽大学に留学。2007年東京藝術大学大学院修了。安宅賞受賞。赤星恵一、金昌国、細川順三、ヴォルフガング・シュルツ、ハンスゲオルグ・シュマイザーの各氏に師事。THE FLUTE QUARTETのメンバー。東京藝術大学講師としても教育活動にたずさわる。神戸や北京二コレなどの国際コンクール、日本音楽、日本管打楽器、日本木管、東京音楽、三田ユネスコ、仙台フルート、全日本学生などのコンクールにおいて審査員を務める。アジア・フルート連盟東京常任理事。日本フルート協会特任理事。これまでに「APPASSIONATA」「モーツァルト・オペラデュー」など多くのCDをリリース。2018年に音楽之友社より「上達の基本 フルード」を発表。四重奏を中心に二重奏から大編成のものまで60タイトル以上のフルートアンサンプル作品を編曲・出版している。

研究分野 —— 私たちフルート奏者はJ.S.バッハ以降現在までおよそ300年間に作られた作品を取り扱います。そのためには少なくとも直近300年間のヨーロッパの歴史、文学、美術、そして宗教と哲学に関する知識を持つ必要があります。昔の人々が何に共感し何を美しいと思ったか、現代の我々が思いを馳せるためには幅広い知識を持つ必要があります。

もちろん、演奏家としてアウトプットに磨きをかけることを怠ってはなりません。基礎に忠実に、常に理に合った無駄の無い奏法を心がけることが肝要です。

大学院では、学部で学んだ技術の上に、聴衆と自らの琴線に触れる事のできる音楽表現とそれに必要な技術と見識を追求します。

熊本 マリ（くまもと まり）教授

profile —— スペイン王立マドリッド音楽院、米国ジュリアード音楽院、英国王立音楽院で学ぶ。ホアキン・ソリアノ、サーシャ・ゴロニッキ、アンジー・エステルハーザーに師事する。英国ニューポート国際ピアノコンクールでは故ダイアナ妃から受賞する。スペインの作曲家、フェデリコ・モンボウの全作品を録音し初めて世界に紹介する。スペイン音楽のスペシャリスト。レパートリーは幅広く、古典から現代曲まで手がけ、CDもキングレコードから多数リリースされている。日本の作曲家にも積極的に取り組んでおり、奥村一の作品も世界で初演する。国内外で演奏活動を行う。チェコフィルハーモニー管弦楽団、ベネズエラ交響楽団、カイロオペラ交響楽団、ウィーンフィルのメンバーとも共演。テレビ出演、執筆活動、国際コンクールの審査員など幅広くグローバルに活躍するアーティスト。

研究分野 —— スペインや南米の作曲家を積極的に広めている。J.S.バッハのゴールドベルグ変奏曲をはじめ、バッハの作品の録音と演奏もライフワークとして続けている。自身の海外経験、独自の音楽教育の講演やトークコンサートは好評を得ている。音楽で人々を幸せにする事をモットーとしている。

辻 浩二（つじ こうじ）客員教授

profile —— 1975年、京都市芸術大学卒業、卒業と同時に大阪市音楽団へ入団。1976年11月、日本テレマン協会の東京公演で、バッハ作曲「口短調ミサ曲」公演を皮切りに、バッハの古典的ホルンの演奏で高い評価を受ける。1978年、ドイツ、ケルン音楽大学へ短期留学。その間、北西ドイツフィルハーモニーオーケストラに客演する。1980年10月、フルートの金昌国氏とのコンサートでバッハ作曲「ブランデンブルク協奏曲第2番」の独奏を受け持つ。1983年3月、大阪にて、宮本文昭氏（ケルン放送響オーボエ）と井上直幸氏（ピアノ）らのジョイントコンサートに出演する。1993年11月、京都やまなみホールにて、R・シトラウス作曲、ホルン協奏曲第1番を演奏する。1998年1月、ドイツ、ラインランド州立音楽学校主催のホルン講習会の講師として招聘される。1990年より、木管五重奏としての、「アンサンプル・ダンツィ大阪」の活動を主宰する。2015年9月、イギリス、Hastingsで開催の、第3回International Composers Festivalのホルン奏者として招聘される。これまでに、宮村剛司、故真下淳至、エーリッヒ・ベントツェル、故ズデニェク・ティルシヤル各氏に師事。1995年より、大阪芸術大学の非常勤講師として、室内楽および、ホルンの指導を始める。2012年4月、大阪市音楽団団長に就任し、同時に楽団の民営化に向けて指示を受け、一般社団法人大阪市音楽団を組織する。2014年4月、一般社団法人大阪市音楽団事務局長兼、専務理事に就任。2015年、退職と同時に、顧問就任。現在、大阪芸術大学客員教授、関西室内楽協会ゼネラルマネージャー

研究分野 —— 「ホルン」「室内楽」
ホルンという金管楽器の歴史を知り、バロック期から現代までに多くの作曲家が、この楽器を好み、多くの作品に取り入れた魅力を研究する。特に、室内楽の分野では、古典からロマン派までに、ホルンが急激に進化し、それと多くの名手が誕生した。それを裏付ける楽曲を研究することで、学生の音楽的な能力を高めていく。そのための指導をこれまでの経験を生かしサポートしていく。

中谷 満（なかに みつる）客員教授

profile —— 1973年3月京都市立芸術大学音楽学部打楽器専攻科を卒業。1973年4月大阪フィルハーモニー交響楽団に入団。1977年3月より旧西独国立ベルリン高等音楽院に留学。W. テューリヘン氏、K. キースナー氏に師事。その間、ベルリン放送管弦楽団、西独ベルリンドイツオペラ管弦楽団などに出演。1978年4月大阪フィルハーモニー交響楽団に復団、1980年より現代音楽集団「グループM」を主宰。1990年より中谷満（バーカッションアンサンプル）「シュレーゲル」を主宰。2008年3月大阪フィルハーモニー交響楽団を退団。2014年・2015年・2018年・2019年フライブルグ音楽大学打楽器科定期演奏会に参加。マスタークラスを行う。2018年度、滋賀県文化賞受賞。現在、相愛大学音楽学部教授。

演奏活動歴 —— 1981年 朝比奈隆指揮大阪フィルハーモニー交響楽団にて平吉毅作作曲「独奏ティンパニーとオーケストラの為の海のある風景」を独奏。1986年「吉原すみれプロデュースシリーズ」に参加。1986年 大津管弦楽団の定期公演にてジャン・バリッサ作曲打楽器協奏曲を独奏。1987年 岩城宏之、一柳慧、木村かおり氏とバレット「二台のピアノと打楽器の為のソナタ」共演。1993年 大津管弦楽団の定期公演にてW. テューリヘン作曲「ティンパニー協奏曲」を独奏。1995年 関西打楽器フェスティバルにてW. テューリヘン指揮にてW. テューリヘン作曲「ティンパニー協奏曲」を独奏。2000年 下野竜也指揮、大阪フィルハーモニー交響楽団と、ヘルテル作曲「八台のティンパニーの為の協奏曲」を独奏。2004年 大津シンフォニックバンドの定期演奏会にてレスピーギ作曲「ローマの祭り」等を指揮。2006年 大津シンフォニックバンド定期演奏会にて、天野正道作曲「12台のティンパニーの為の協奏曲」を独奏。2010年 龍谷大学吹奏楽部定期公演にて酒井格作曲「ティンパニ協奏曲」初演。2012年 相愛大学Wオーケストラ定期公演にて大前哲作曲「ティンパニ協奏曲」初演。2016年 /ジエの首響打楽器にて武満徹作曲「四季」を山口恭範、宮本妥子、永田砂知子と共演。2017年 京都新祝祭オーケストラ定期公演にてW. テューリヘン作曲「ティンパニー協奏曲」を独奏。

仲道 祐子（なかみち ゆうこ）教授

profile —— 心に染み入る情感豊かな音楽性と暖かい音色を持ち味とし、聴衆に愛されるピアニスト。桐朋女子高等学校音楽科を卒業後渡独、クラウス・シルデ氏に師事。ミュンヘン国立音楽大学、同大学院ピアノ科及び室内楽科を卒業。ドイツを拠点にソロ活動を行う。海外で数々の国際コンクール入賞後、日本での本格的ソロ活動を始め、現在はリサイタルの他、オーケストラとの共演や室内楽をはじめ朗読とのコラボレーションなど多彩な活動を行っている。

最新CD「愛は風によって」(オクタヴィア・レコード)はレコード芸術特選盤に選ばれた。

研究分野 —— スカルラッティやバッハの時代から、古典、ロマン派、印象派、ロシアやアメリカ音楽など幅広いレパートリーを研究。それぞれの時代様式や作曲家の個性を捉え、紙の上に書かれている楽譜がどう実際の音楽としてあるべきか、どう演奏されるべきかを考察。それに必要なテクニックも研究している。

また、本番でベストの演奏が出来るよう、普段の練習の仕方から本番の日までの練習ペースの持っていく方、精神的な準備のあり方、そして本番時の心の状態の保ち方など、ピアニストとして必要になってくる過程を研究。

橋爪 伴之（はしづめ ともゆき）教授

profile —— 1982年大阪芸術大学をグランプリで卒業。第49回日本音楽コンクール入選。第1回日本管打コンクール第2位。特別審査員V.チコヴィッツ氏に認められアメリカシカゴのノースウェスタン大学に留学。シカゴにてリサイタルを開催。大阪シンフォニカー(現大阪交響楽団)首席トランペット奏者を経て1987年大阪フィルハーモニー交響楽団に入団。2003年からはV.ゲルギエフ指揮のワルドルフ・オーケストラフォアピースのメンバーとしてもヨーロッパ、ロシア、中東、各地で演奏。2012年にはニューヨークカーネギーホール、シカゴオーケストラホールでも演奏する。

研究分野 —— 人間の脳と呼吸と楽器演奏との関連性の研究。過去十数回にわたる渡米に於いて名教師、一流奏者から学んだ事を具現化し出来るだけ多くの人に伝える。本来楽器演奏というのは技術習得だけではなく音楽表現であるという考え方に基き脳で思い描いた音楽をいかに自然に演奏するのかという事を研究の主たるテーマにしている。

花崎 薫（はなざき かおる）客員教授

profile —— 東京藝術大学在学中、ドイツ学術交流会給費留学生としてベルリン芸術大学留学。東京藝術大学在学中に安宅賞を受賞。1981年、第50回日本音楽コンクール、チェロ部門第3位入賞。1986年、文化庁在外研修員としてドイツ、カールスルーエ音楽大学に留学。長年にわたり、新日本フィルハーモニー交響楽団の首席チェロ奏者として、歴代の指揮者のもとで、オーケストラを支えた。現代音楽のアンサンブル、東京シンフォニエッタのメンバーとしても活躍し、2011年同団としてサントリー芸術財団、佐治敬三賞を受賞。現在、愛知県立芸術大学音楽学部教授、名古屋音楽大学客員教授、東京藝術大学、武蔵野音楽大学非常勤講師。2013年、ベートーヴェン、チェロとピアノのための全作品のCDを発売。

研究分野 —— バロック音楽における通奏低音からハイドン以降の室内楽、現在ベートーヴェンの後期弦楽四重奏作品、Op.127以降の作品を所属するエルデーディ弦楽四重奏団においてCD録音プロジェクトを進めている。本年op.132の録音により完結。「本年の研究テーマとして、ベートーヴェンのチェロとピアノのための全作品のコンサートを秋に行う予定」。東京シンフォニエッタのメンバーとして現代作品の演奏に取り組み、年、2回の定期公演を行っている。チェロのあらゆる可能性を追求し、様々な形態のアンサンブル、ソロ楽器としての可能性を研究する。

東口 泰之（ひがしぐち やすゆき）客員准教授

profile —— 東京藝術大学、ドイツ国立ロツシンゲン音楽大学大学院修了。1998年ドイツのポツダムで開催された第2回ファゴットカルテット国際コンクール第2位入賞。第15回日本管打楽器コンクール第1位、及び特別賞、東京都知事賞、文部大臣奨励賞を受賞。京都市交響楽団副首席奏者。いずみシンフォニエッタ大阪、関西室内楽協会メンバー。これまでに星野則雄、滝本博之、霧生吉秀、小山昭雄の各氏に師事。

研究分野 —— 1999年から3年間サイトウキネンオーケストラメンバー。大阪フィルハーモニー交響楽団とR.シュトラウスの二重小協奏曲、いずみシンフォニエッタ大阪と西村朗氏のタバスを共演。NHK-FMリサイタル、やまなみ国際音楽祭、夏祭などにわくとも室内楽、サマーミュージックフェスティバルに度々出演。リサイタルをいずみホールで二度開催。ザ・フェニックスホール、札幌KITAARAホールでファゴットデュオジョイントコンサートを開催し札幌市民芸術祭大賞を受賞。ファーストアルバムをリリース。

三浦 徹（みうら とおる）客員教授

profile —— 東京藝術大学卒、安宅賞受賞。ユーフォニアムと吹奏楽の研鑽のため渡米。南ミシシッピ大学大学院修了、イーストマン音楽学校に学ぶ。イーストマン・ウィンド・アンサンブル奏者として活躍。フレデリック・フェネルとドナルド・ハンスバーガーの薫陶を受けた音楽家の一人。現在、国立音大招聘教授、常葉大短大客員教授、JBA副会長／国際交流委員長、国際テューバ・ユーフォニアム協会名誉評議員。東京佼成ウィンド・オーケストラに30年在籍。ユーフォニアム奏者として数多くの国際大会に招かれITEAより生涯功労賞を受賞。「ユーフォニアムと吹奏楽を通しての社会貢献と国際交流がライフワーク」

研究分野 —— Euphoniumユーフォニアムという歴史の新しい楽器の歴史、奏法、レパートリー(作品研究)、指導法、そして音楽界や社会におけるニーズを課題に掲げる。吹奏楽(西洋音楽)が日本に伝来してから今年で151年目を迎えるが、今尚、ヨーロッパでは“文化”、アメリカでは“教育”、日本では、“盛んな現象”とされる現状である。本課程では、学問としてのユーフォニアムを文化、教育に進化させる事を目的とする。

本田 耕一（ほんだ こういち）客員教授

profile —— 大阪音楽大学付属音楽高校を経てフランス国立ルーアン音楽院に留学。1976年、同音楽院クラリネット科および室内楽科を卒業。帰国後、数多くのリサイタルおよび室内楽演奏会を開き好評を博す。なかでも、近代・現代の作曲家の作品演奏を数多く手がけ、ストラヴィンスキー、ベルク、ケルター・ボーン、山口福男など多数の邦人・外国人作曲家の作品を関西で初演し高く評価される。1986年より日本音楽コンクールクラリネット部門、日本クラリネットコンクール、日本管打楽器コンクールクラリネット部門、日本木管コンクールクラリネット部門、宝塚バガ音楽コンクール、豊中音楽コンクールの審査員を歴任。

現在、大阪音楽大学大学院管弦打研究室主任教授、大阪音楽大学連携支援センター長、学校法人大阪音楽大学常任理事、学校法人大阪音楽大学副理事長、日本クラリネット協会理事。

研究分野 —— ベーム式クラリネットの奏法、フランス近代・現代作品の分析と演奏、クラリネットオーケストラ

木村 寛仁（きむらひろまさ）客員教授

profile —— 1963年、兵庫県生まれ。大阪芸術大学演奏学科にて、ユーフォニアムを専攻しグランプリを得て卒業。的場由季、三浦徹の各氏に師事。その後、米国Dr.Brian L.Bowmanの許で研鑽を積む。日本管打コンクール入選、世界ユーフォニアムチューバカンファレンス独奏コンクール第2位などの栄誉にも浴した。現在、大阪音楽大学教授。ユーフォニアムアンサンブル「フェニックス」音楽監督。大阪小児医療倶楽部主宰、日本ユーフォニアムチューバ協会理事。川西市文化・スポーツ振興財団理事。

研究分野 —— 金管楽器の奏法／金管楽器で歌を歌うということ

以上2点を、研究テーマとしています。前者は如何に効率よく合理的に楽器を鳴らすかを既存の多種にわたる金管楽器全般の教則本を利用することから突き詰めていきます。後者は、音楽の本質に触れる作業。シンプルなフレーズを深く考察し、読み解くことから普遍的な「歌」の表現を目指します。

音楽**永松 圭子（ながまつ けいこ）客員教授**

profile —— 京都市立芸術大学及び同大学院音楽研究科修了。バロック時代～近現代まで幅広い宗教曲のソリストとして活躍。ドイツリートや日本歌曲のコンサートやリサイタルも精力的に行なっている。オペラではモーツァルト「フィガロの結婚」ケルビーノ、チマローザ「秘密の結婚」フィダルマ、ビゼー「カルメン」メルセデス、林光「おこんじょうり」ばばさま、磯部叔 室内オペラ「タ立」佐藤トミ（初演）に出演。京都音楽協会賞、第10回新・波の会日本歌曲コンクール第2位受賞。

研究分野 —— 大学院修士論文「バッハ・教会カンタータの実践における演奏法の研究～Kantate“Geist und Seele wird verwirret” BWV35についての考察～」。J.S.バッハの音楽作品、教会カンタータ、世俗カンタータ、オラトリオ、モテット、ミサ曲、「マタイ」「ヨハネ」両受難曲の演奏を30年に渡り研鑽を積み、発声、発音、レトリック、装飾法などその時代的背景に裏付けられる表現方法の研究を続けている。また日本歌曲においても新曲初演も数多く、日本語の発声、発音、そして呼吸法など表現の可能性を追求し、邦楽器との融合も模索、研究対象としている。

水口 聡（みずぐち さとし）教授

profile —— ウィーン国立音楽大学を邦人初、全員一致の首席で卒業しオーストリア文部大臣賞受賞。バリトンとしてミラノ国際コンクールで第1位、ホセ・カレーラス賞受賞。ウィーン国立歌劇場でデビュー。テノールとしてトライアン・グロサベスク国際声楽コンクール第1位グランプリ受賞。アテネ国立歌劇場でデビュー。ヨーロッパの歌劇場で「トゥーランドット」他40以上の主役で成功を収める。新国立劇場の柿落としや日中国交正常化40周年記念オペラでは「アイダ」ラダメス役に抜擢。新ローマ法王誕生祝典ミサにてテノール・ソロに招聘され全世界にラジオ中継される。ゲルギエフ指揮マリンスキー管弦楽団と共演。

研究分野 —— 現在は、オペラでの演奏活動が多い私ですが、ウィーンではリート解釈における世界的權威、Dr.エリック・ヴェルバ氏の下で最後の弟子としてリート及びオラトリオを学びました。解釈はもちろんのこと、特に歌手と伴奏者との絶妙な呼吸の取り方など、氏から得たものは大きな財産となっています。各々の作曲家のスタイルを見抜く感性と、正しい発声のもと作品をよりよく伝える為のテクニック、それぞれの歌手に合ったレパートリー選びなどはオペラのみならずリートに於いても重要で、それらを多くの人々に伝えることを目指します。

三原 剛（みはら つよし）教授

profile —— 1984年大阪芸術大学卒業。日本音楽コンクール第一位、同時に増澤賞、福沢賞、木下賞、松下賞を受賞。日伊コンクール金賞。第4回五島記念文化賞オペラ新人賞（海外派遣賞）受賞。大阪舞台芸術奨励賞受賞。藤堂頭一郎音楽褒章受章。大阪文化祭賞受賞

研究分野 —— N響を初め数多くのオーケストラの定期演奏会に招聘され、数多くの作品を演奏。1995年ハーゲン歌劇場におけるヴェルディ「トロヴァトーレ」ルーナ伯爵役。また同役でヴィッテン・グンマースバッハ両劇場にも出演しいずれも好評を博す。1993年、1995年ドイツハットリスデン日本公演マタイ・ヨハネ両受難曲イエスを歌う。2001年びわ湖ホールプロデュースオペラ・ヴェルディ「アッティラ」（日本初演）に出演。2006年8月ザルツブルグ音楽祭に出演。

作曲**高橋 裕（たかはし ゆたか）客員教授**

profile —— 東京藝術大学音楽学部作曲科を経て同大学院作曲専攻修了。日本交響楽振興財団作曲賞入選。世界仏教音楽祭コンクール第1位受賞。国際カル・マリ・フォン・ウェーバー室内楽コンクール第1位受賞。第1回芥川作曲賞受賞。2003年室内楽作品個展、2016年管弦楽作品個展を開催。2015年から東日本大震災復興応援公演、オペラ「双子の星」を仙台、東京、盛岡で開催。2枚のCDをリリースしている。東京藝術大学講師、同附属音楽高等学校教諭を経て、現在大阪芸術大学客員教授、名古屋音楽大学特任教授として後進の指導にあたっている。

研究分野 —— ソロの作品から室内楽、大編成のオーケストラ、オペラにいたるまでの様々な領域に及ぶが、作品はクラシック現代音楽の分野に位置し、今までにない実体をもつ音楽の作曲を志している。作品の技法や構成の大本は、西洋音楽の流れから発しているが、発想や構想の根源的なところは、日本やアジアの音楽の間(ま)や空間の捉え方が主となっている。昨今の作品に和楽器とオーケストラのための作品が多くなってきているのも、ここに起因している。

田中 久美子（たなか くみこ）教授

profile —— 香川県高松市生まれ。京都市立芸術大学音楽学部作曲専修卒業。作曲を藤島昌壽、池内友次郎（東京藝術大学名誉教授）の両氏に師事。フーガ、及び、ソルフェージュをエディット・ルジエ（フランス国立パリ高等音楽院教授）、ミッシェル・メルレ（同教授）の両氏に師事。相愛大学、京都女子大学、大阪芸術大学非常勤講師、大阪芸術大学准教授を経て、2017年4月より大阪芸術大学教授。2018年香川県文化芸術選奨受賞。一般社団法人日本音楽著作権協会（JASRAC）正会員。

研究分野 —— オペラ、管弦楽、自衛隊音楽隊等からの委嘱による吹奏楽、フランスの出版社からの依頼によるソロやアンサンブル曲、吹奏楽コンクール課題曲など多数の楽曲を発表。100曲を超える作品の楽譜・CDがフランス、オランダ、日本で出版・リリースされている。2006年第1回ランペルサル国際吹奏楽作曲コンクール・アルトサキソフォン協奏曲部門第1位（受賞曲「セドナ」）。2014年高松市からの依頼によりオペラ「扇の的」を作曲、初演（2018年ブルガリア国立スタラザゴラ歌劇場にて再演）。2020年11月のイシー・レ・ムリノー音楽院からの招聘を受け、マスタークラスと自身の作品による演奏会を開催。著書に「対位法教程」（レッスンの友社、共著）がある。

檜垣 智也（ひがき ともなり）客員教授

profile —— 作曲、アコースモニウム演奏。愛知県立芸術大学大学院修了。九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻博士課程後期単位修得退学。博士（芸術工学、九州大学）。フランスに留学しドニ・デュファールの許で研鑽を積む。ハーバード大学、ケルン大学、フランス国立視聴覚研究所音楽研究グループなどで招待公演を行う。第五回国際リュック・フェラーリ・コンクール最高賞（2003）、第十八回文化庁メディア芸術祭審査委員会推薦作品（2014）など受賞・入選多数。2枚のソロCDを出版。2005年よりフランスFutura国際音楽祭講師。

研究分野 —— 電子テクノロジーを活用した新しい音楽表現の実践（作曲、上演、演奏、教育）及びそれに関わる研究。特にアコースモニウム（多元立体音響装置）演奏活動を国際的に展開する。近年は音と空間を結びつけたサウンド・パフォーマンス、視覚と聴覚を結びつけたクロスモーダルなワークショップの開発、芸術祭のキュレーションやディレクションなども手がけている。代表作『豊饒の海』（2009～2011）はフランス・パリをはじめ10ヶ国で上演。学位論文「アコースモニウムを用いた電子音響音楽の上演に関する研究」（2015／九州大学）

芸術研究科 博士課程(前期) 芸術文化学専攻/芸術制作専攻共通

担当者

共通

青砥 華 (あおと はな) 教授

profile —— 相愛大学音楽部卒業。同大学研究科修了。同大学新人演奏会、朝日推薦演奏会、神戸市KACCコンサートに出演。1982、1999、2000、2002、2003、2005、2007年、大阪にてリサイタルを開催。その他、モーツァルト室内管弦楽団、ブルガリア国立トルブーン室内合奏団、チェコ室内合奏団「ヴィルトー・ジ・ブラハ」他と協演。クルクスアンサンブル結成し、国際交流基金の助成を得て、パラグアイ共和国に於いて、在パラグアイ日本大使館後援、パラグアイ=日本基金主催による演奏旅行を行う。大阪芸術大学オーケストラコンサートミストレス。

研究分野 —— ヴァイオリン演奏の指導法及び、アンサンブル(オーケストラ・室内楽)に於けるヴァイオリン演奏の技術研究。

荒川 淳彦 (あらかわ あつひこ) 教授

profile —— 美術空間デザイナー。映画制作の場合は「美術監督」。テレビドラマの場合は「美術デザイナー」。劇場演劇の場合は「美術装置家」と、様々な立場は変わりますが、基本的にはスタジオや劇場等での、美術セットのデザインが主な職務。

作品例

映画 「HERO」「プリンセス・トヨトミ」

ドラマ 「やすらぎの刻〜道〜」テレビ朝日、「イノセンス」「正義のセ」日本テレビ

舞台 「夫婦善哉」中日劇場 博多座 等

研究分野 —— 映像を中心とした空間デザインシナリオ 台本に基づき、それを映像に表現する際に映画やテレビまたは演劇表現の際には、その独特の文化の中で培われた作法や習慣が違い、その異なりを分析し独創的な空間デザインの演出思考を行っている。また、街頭でのビジョン画像や、イベントでの画像表現にも注視し、コンピュータグラフィックやインテリア等の多面分野の合流や合同研究も同時に行っている。身近な住居環境や店舗そして地域コミュニティーの研究への参加も積極的に行っている。

石津 勝 (いしづ まさる) 准教授

profile —— 大阪府吹田市生まれ。1982年京都市立芸術大学美術学部造形学科を卒業後、高校教員として美術及び工芸科目を担当。その後ディスプレイ会社に入社、飲食・物販などの店舗デザインや博物館・資料館などの展示デザインを行う。2000年フリーランスとなり現在に至る。主なデザイン物件に、阪急百貨店、滋賀県多賀町博物館、普賢岳災害記念館他。主な入選受賞に、ディスプレイデザイン賞、ナショナルライティングコンテスト、朝日現代クラフト展他。京都芸大美術教育研究会、芸術普及活動NPO法人APPi、インテリアプランナー協会に所属。

研究分野 —— 空間及びディスプレイを主としたデザイン分野、芸術普及活動や美術制作を主としたアート分野、工芸制作を主としたクラフト分野など、造形分野全般の中で広義的な空間(場)づくりに関わることを研究対象としている。デザイン実務や芸術普及活動を含む社会活動から、体験し学んだ事を分析し再構成することで研究を進め、最終的に教育活動に結びつけることを念頭に置いている。大学院の教育に於いては、大学院生自らの表現作品をどの様に見せるのか?どのような表現空間をつくるのか?といった観点からの指導を心掛けている。

市川 衛 (いちかわ まもる) 教授

profile —— 1978年京都大学理学部卒業。1979~84年パイオニア株式会社。1990~1991年アーク都市塾/パソナカレッジ講師、1997年有限会社インターアート設立。2000年より大阪芸術大学助教授を経て現在、アートサイエンス学科教授。代表的なインタラクティブ・インスタレーションにHyperKeyboardシリーズ(1989~)、Interaction Paintingシリーズ(1993~)、N-E-W-Sシリーズ(2003~)、DEN-WAシリーズ(2005~)などがある。

研究分野 —— インタラクティブ・インスタレーション制作、デジタルコンテンツ制作、インタラクティブ・アプリケーション開発、メディアパフォーマンス、リズムワークショップ。インタラクティブ・コミュニケーションに関する独自理論を展開。1994年「インタラクティブアート宣言」、2003年「芸術情報論」などの著作。旋律合成に関する日米特許、繰り返し画像の合成に関する米国特許を取得。1997年テレビBOX、1998年タイルメーカー、2011年Marching Sanneなどアプリケーションを企画・開発。

上田 順平 (うえだ じゅんぺい) 講師

profile —— 2002年大阪芸術大学美術学部工芸学科陶芸コース卒業。2005年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程工芸専攻陶磁器修了。2010年五島記念文化財団研修員としてメキシコに滞在。2012年宝塚大学造形芸術学部専任講師。2019年京都市立芸術大学美術学部専任講師。2019年大阪芸術大学工芸学科非常勤講師。2006年京都府美術工芸新鋭選抜展~2006 新しい波~ 工芸部門最優秀賞。2008年第11回岡本太郎現代芸術賞 岡本敏子賞。2010年五島記念文化賞 美術新人賞。2013年第31回京都府文化賞奨励賞。2018年京都市芸術新人賞。

研究分野 —— やきものにおける芸術表現の研究。主な個展2017年「リン/デン」京セラ美術館、2019年「シン/エン」横浜市民ギャラリー。主なグループ展2006年京都府美術工芸新鋭選抜展2006-新しい波-(京都府文化博物館)、2008年第11回岡本太郎現代芸術大賞展(川崎市岡本太郎美術館)、2009年装飾の力(東京国立近代美術館工芸館)、2010年BASARA(スバイラルガーデン)、2012年ジグザグ展(新潟県立万代島美術館/高崎市美術館八戸市美術館/秋田県近代美術館)、2016年Cerámica Contemporánea en Chiapas(Centro Cultural de Chiapas "Jaime Sabines" /メキシコ)、2017年cross border works 遊糸「ときを遊ぶ」(アートスペース虹)。

内村 由紀 (うちむら ゆき) 准教授

profile —— 1983年東京ガラス工芸研究所卒業後、制作活動とともにPilchuck Glass School (シアトル)、Urban Glass Studio(NY)、Centro Studio Vetro (ベネチア)、Rochester Institute of Technology(NY)、Art Academy of Latvia(ラトビア)、富山ガラス造形研究所、徳島ガラス工房などに指導。1991年~2001年東京ガラス工芸研究所講師。1996年より内村Arts & Crafts Glass主宰。2006年より大阪芸術大学専任。『パート・ド・ヴェールの技法』(東京ガラス工芸研究所刊行/供書)『デザインの現場・もっと立体つくりたい』(美術出版社/供書)Glass Art Society会員。

研究分野 —— キルンワーク/ガラス美術品修復と復元
MARUNOUCHIホテル(東京)、東急STUDIO(東京)、虎ノ門イーストビルディング(東京)、三井住友銀行(東京目黒支店/名古屋藤が丘支店)、月島キャピタルゲートプレイス(東京)、目黒雅叙園(東京)等にガラスオブジェを設置。道ノ尾病院(長崎)、広尾ガーデンフォレスト(檜木/桜棟)にガラスの室内装飾を制作。コーニンググラス美術館(ニューヨーク)、ローザンヌ装飾美術館(スイス)、サンパウロ美術館(ブラジル)に作品収蔵。古代から現代までのガラス美術品の修復と復元。

大 平 弘（おおひら ひろし）教授

profile —— 1961年生まれ。大阪芸術大学デザイン学科卒業。2004年大阪芸術大学デザイン学科准教授、2017年教授。OPEL DESIGN CONTEST／審査員特別賞、朝日広告賞／準朝日広告賞、毎日広告デザイン賞／優秀賞、他国内団体展での受賞多数。7th.メキシコ国際ポスタービエンナーレ、世界ポスタートリエンナーレトヤマ2003・2009・2012。ラハティ国際ポスタービエンナーレ、トゥルナバポスタートリエンナーレ入選。JAGDA 年鑑、日本タイポグラフィ年鑑など作品掲載。JAGDA、総合デザイナー協会会員。

研究分野 —— グラフィックデザイン。『素材と表現』をテーマに作品制作し、グラフィックデザインの素材として表現手法を研究している。また、造形作品自体も研究対象にしている。大阪・東京・香港（IPreciation Hong Kong）、うめだ阪急本店美術画廊などでの個展。東京オペラシティギャラリー 収蔵品展021 [素材と表現]、042 [やさしさの気配]、050 [木を彫る] 東京オペラシティ文化財団など。他書籍装画「面白い人間学」、「読書論としての人生論」致知出版社、「思い出をなくした男」PHP 研究所など。ブラティスワホ新宿：造形作品設置。

大 友 直 人（おおとも なおと）教授

profile —— 桐朋学園大学を卒業。指揮を小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明、岡部守弘各氏に師事した。桐朋学園大学在学中からNHK交響楽団の指揮研究員となり、22歳で楽団推薦によりNHK交響楽団を指揮してデビュー。現在、群馬交響楽団音楽監督、東京交響楽団名誉客演指揮者、京都市交響楽団桂冠指揮者、琉球交響楽団ミュージックアドバイザー。また、2004年から8年間にわたり、東京文化会館の初代音楽監督を務めた。

第8回渡邊暁雄音楽基金音楽賞(2000年)、第7回齋藤秀雄メモリアル基金賞(2008年)を受賞。

2001年より、指揮者アラン・ギルバート(ニューヨーク・フィルハーモニック音楽監督)と国際音楽セミナー「ミュージック・マスタース・コース・イン・ジャパン」(MMCJ)を開催。邦人の新作にも力を注いでいる。

2012年11月 福田勲：イーハトーヴ交響曲 日本初演

2013年1月 三枝成彰：オペラ「KAMIKAZE—神風」 日本初演

2014年1月 千住明：オペラ「滝の白糸」 日本初演

奥 佳 弥（おく かや）准教授

profile —— 1985年 奈良女子大学住居学科卒業。1985～86年 造家研究室勤務。1990～92年 アムステルダム自由大学文学部オランダ政府給費留学。1994年 京都工芸繊維大学大学院博士後期課程修了。博士(学術)。1994～99年 神戸芸術工科大学環境デザイン学科助手。2000年 大阪芸術大学建築学科専任講師を経て現在、同学科准教授。2007年 アムステルダム自由大学客員研究員。主な著書として、『リートフェルトの建築』、『デ・ステイル1917～1932』、『ヨーロッパ建築史』、『国際デザイン史』、『モダニズム再考 海外編』、『モダニズム再考 日本編』など。

研究分野 —— 近代建築史、住居意匠

川 南 恵（かわみなみ めぐみ）客員教授

profile —— 1988年武蔵野美術短期大学芸術デザイン科を卒業後、舞台美術家アシスタントを経て1990年ロンドンのMotley Theatre Design Courseにて学ぶ。1993年に帰国後は舞台制作者・コーディネーターとして活動する。1999年～2001年「関西演劇ワークショップ」、2003～05年「俳優指導者養成ゼミ」を企画・製作する。2005年4月～2009年3月新国立劇場演劇研修所カリキュラム・コーディネーターとして勤務。2009年4月放送大学教養学部心理と教育コースに編入、2013年4月京都大学大学院教育学研究科入学、2015年同大学院修了(教育学修士)。2019年1月発達障害コミュニケーション初級指導者、同年8月認定心理士取得。

研究分野 —— 専門は俳優教育、俳優指導者教育、演劇教育である。「俳優を育てるために教育は必要か、もし必要であればどのような教育が妥当か」を主たるテーマに実践的・理論的な調査・研究をおこなっている。また並行するかたちで演劇的手法を教

育の場で応用する演劇教育の調査・研究、俳優指導者や演劇教育者の人材育成にも力を注いでいる。近年では認知科学や教育人間学の観点からも考察をおこなっている。演劇と教育の2つの領域に興味関心を持ち、且つ知性・感性・身体性を自ら涵養する強い意志を有する学生との学びの時間の共有を期待している。

片 岡 淳（かたおか じゅん）講師

profile —— 大阪芸術大学工芸学科卒業。吉岡常雄氏に師事。正倉院伎楽衣装、南米ペルー貝紫調査等。琉球大学名誉教授。国際服飾学会第八代会長。天然染料顔料会議副会長。内閣府平成30年度沖縄型産業中核人材育成事業実行委員会議長。知花花織・南風原花織・国指定経済産業省構造審議会委員2011・2016。文部科学省若手在外研修北欧1992～93。

研究分野 —— Le Fil Blue “La Cheminee” in Albif [日本の藍] 展覧会講演および資料展示2018.5～6。日仏学術フォーラム「色の民俗学詩的分析～染色の実体験から色の創作まで～」日本側代表”Findings through the natural colors How to teach the traditional know-how and knowledge about color in Japan for the contemporary textile dyeing”2016.10。日本学術振興会ストラスブール研究連絡センター・トゥールーズ大学主催。The Embroidery Costume of Ryukyu Cultures in Early Modern Period - Focusing on Style and Pattern 国際服飾学会会議 in Taiwan

加 藤 哲 弘（かとう てつひろ）非常勤講師

profile —— 1976年京都大学文学部美学美術史学科卒業。1978年京都大学大学院文学研究科修士課程美学美術史学専攻修了、1981年同博士課程単位取得満期退学。京都大学文学部助手、大阪学院短期大学助教授および教授を経て、1997年より関西学院大学文学部文化歴史学科教授。1998年より関西学院大学大学院文学研究科博士課程前期課程教授、2000年より関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程教授。美学会、美術史学会、日本映像学会、大正イマジナリ学会、京都哲学会会員。

研究分野 —— 美学、美術史学史、イメージ学を専門としている。現在の研究テーマは、具体的に、イメージ解釈の方法論、人類学的観点からみた物語絵画の構造と機能、近代ドイツ語圏における制度としての美術史学の成立、日本や非西欧地域への美学と美術史学の移植、装飾文様の発展史、感情移入の美学、カント「判断力批判」における(とくに料理と味覚に関する)具体例など。主要な研究業績には、『ムネモシユネ・アトラス』、『美術史学の系譜』、『美学における啓蒙と未開』、『明治期日本の美学と芸術研究』などがある。

木 村 和 実（きむら かすみ）准教授

profile —— 大阪大学文学部独文学科卒業。同大学院文学研究科修士課程修了。同大学院博士課程中退。芸術文化学博士(大阪芸術大学)。美学会、美術史学会会員。主な研究業績：「無限へのまなざし～フリードリヒの後姿の人物像をめぐって～」(美學179号)、『ドイツ・ロマン主義の世界』(共著、法律文化社)、『風景画家フリードリヒ・ゲートとの邂逅と別離～』(藝術38号)、『魂のデッサン～吉仲正直論～』(藝術33号)など。

研究分野 —— 専門は西洋美術史。主な研究テーマはドイツ・ロマン派の絵画であり、C.D.フリードリヒを中心とするロマン派の風景画や窓を描いた絵画の研究を行っている。博士論文ではフリードリヒやカールスなどロマン主義絵画における窓のモチーフの図像学的解釈を試み、文学との関連についても考察した。2010年以降は吉仲正直氏(大阪芸術大学名誉教授)や点描の女流画家木下あづさ氏など、関西在住の作家への直接取材に基づいた美術評論に取り組んでいる。また西洋美術における神話と象徴、ドイツ文学と美術との関連なども新たな研究テーマとして考察を深めてゆきたい。

河田 昌之（かわだ まさゆき）教授

profile —— 1954年生まれ。関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程単位修得満期退学。1985年4月～2013年3月和泉市久保記念美術館学芸員。2004～2013年は同館館長。2013年4月からは大阪芸術大学芸術学部教授。現職のほか、前職の和泉市久保記念美術館で非常勤館長も務める。2019年、ニューヨークのメトロポリタン美術館で開催された特別展「源氏物語(The Tale of Genji A Japanese Classic Illuminated)」に関連するコロンビア大学でのシンポジウムで、パネリストとして源氏絵について研究発表した。近著に「宗達伊勢物語図色紙」思文閣出版 2013年、『住吉如慶筆 伊勢物語絵巻』思文閣出版 2019年、『近世土佐派源氏絵』和泉市久保記念美術館 2020年。企画・担当した展覧会は多数。美術史学会会員、美学学会会員、国際浮世絵学会会員、和泉市史編集委員、和泉市文化財審議委員。

研究分野 —— 日本の中世・近世絵画史を専攻する。美術館学芸員として30年以上の経験があり、学芸員としては日本絵画、中国近代絵画を担当した。近年は源氏物語、伊勢物語を題材とする宗達、土佐光吉・光則・光起、住吉如慶・具慶の物語絵とやまと絵を中心に、学芸員、美術館館長としての経験を生かして講義を行い、作品研究とともに展覧会活動を継続している。

倉岡 智一（くらおか ともかず）客員教授

profile —— 武蔵野音楽大学卒業、同大学院修了。
オペラ「ジャンニ・スキッキ」出演を機に舞台衣裳の道に進む。1993年二期会オペラ「シモン・ボッカネグラ」で衣裳家デビュー。その後オペラ、ミュージカル、演劇等数多くの作品をてがける。代表作に新国立劇場「カルメン」、二期会「イル・トロヴァトーレ」、ミュージカル「アパートの鍵貸します」、「ステップングアウト」、演劇では「卒塔婆小町」「雨月物語」等々がある。

研究分野 —— 西洋服飾史の変遷から衣裳を研究する。
服飾から読み取れるその時代を生きていた人々の精神性や思考、夢や野望などの思いを探り、時代考証や人物像立案(キャラクター設定)の重要な創作要素となるような効果的表現方法を探る。

栗山 和樹（くりやま かずき）客員教授

profile —— 神戸市生まれ。国立音楽大学音楽学部作曲学科卒業。同大学院音楽研究科作曲理論専攻修了。文化庁在外研修制度によりスタンフォード大学音楽学部CCRMA(コンピュータ音楽・音響研究センター)に留学。映画音楽研究により博士号を取得(大阪大学)。国立音楽大学教授。日本音楽著作権協会編曲審査委員会委員。NHK大河ドラマ「北条時宗」、東映「極道の妻たち〜決着」をはじめ、映画・ドラマの音楽を担当。「NHK名曲アルバム」、「NHK紅白歌合戦」等、編曲を担当。作編曲家として活動している。

研究分野 —— 商業音楽の分野で、長年、映画、テレビドラマの音楽を担当してきた経験を活かし、実学的、且つ科学的な音楽分析による、映画における背景音楽の研究を主な研究分野としている。映画音楽研究者連絡会を主宰し、シンポジウム等を開催している。また、様々な分野の音楽において、編曲家として携わってきた経験を活かし、クラシック音楽を中心に発展してきた我が国の音楽大学における、新しいジャズ理論メソッド、編曲技法を教授するメソッドの開発を、音楽大学での講義により実践しつつ、研究、改良を重ねている。

玄月（げんげつ）教授

profile —— 1965年大阪市生まれ。2000年に「蔭の棲みか」で第122回芥川賞受賞。主な著書「悪い噂」「山田太郎と申します」「異物」「眷族」「めくるめく部屋」「狂響記」など。2020年より大阪芸術大学教授。

研究分野 —— 短編小説の構造分析。タイプの違ういくつかの短編小説の成り立ちを分析し、それぞれの文体、技法、特徴、癖などを対比する。そこで得た知識を元に短編を創作する。

小林 沙羅（こばやし さら）准教授

profile —— 東京藝術大学及び同大学院修了。2010～2015年ウィーンにてリート、オラトリオ、オペラ、オペレッタを、ローマにてイタリアオペラとベルカント発声を学ぶ。2006年「バスティアンとバスティエヌ」で国内デビュー。2012年ブルガリア国立歌劇場「ジャンニ・スキッキ」ラウレッタ、『愛の妙薬』アディーナで欧州デビュー。2015年野田秀樹演出「フィガロの結婚」スザンナ役で全国10都市14公演に出演。2017年「カルメン」ミカエラで藤原歌劇団に出演。2016年セカンドCD「この世でいちばん優しい歌」をリリース。2017年第27回出光音楽賞受賞。藤原歌劇団会員。

研究分野 —— 声楽作品全般の発声、発音、作品のスタイル、解釈、表現方法の研究と実践(オペラやコンサートなどでの演奏)。特にドイツ歌曲と日本歌曲、オラトリオ、イタリアオペラ、モーツァルトのオペラ、オペレッタを得意とするが、レパートリーは幅広く、スペイン、英米、フランス、ポーランド、チェコ語の作品や、ルネサンス期のリュートとの作品からバロック、古典、ロマン派、近代、現代作品まで、幅広い演奏経験を持つ。また、詩の朗読や演技、ダンス、作詩作曲など、舞台での表現に関わる全般を研究対象とし、自身の演奏活動にも積極的に取り入れている。

笹谷 純雄（ささや すみお）教授

profile —— 1986年京都大学大学院美学美術史学専攻修士課程修了。文学修士(京都大学)。1986年～88年福井県立美術館勤務。1989年～90年京都大学文学部助手。

研究分野 —— 西洋美術史、近代彫刻史。特に18世紀以降の西洋彫刻と明治以降の日本彫刻を研究対象とする。

重政 隆文（しげまさ たかふみ）教授

profile —— 1952年、大阪生まれ。関西大学文学部英文科卒業。関西大学大学院文学研究科博士課程前期(修士課程)修了。文学修士。1983年、大阪芸術大学講師、1991年、同助教授、2001年、同教授。日本映像学会会員。著書に映画関連では、『勝手に映画書・考』『映画の本の本』『映画の本の本Ⅱ』『映画批評は批評できるか・番外編』『そして誰も観なくなった』『映画「評論家」未満』。ミュージカル関連では、『ザッツ・ブロードウェイ・ミュージカル』『ザッツ・ブロードウェイ・ミュージカルⅡ』がある。現在、『映画論叢』(国書刊行会)に映画批評論を連載中。

研究分野 —— 海外の劇作家ではアイルランド出身のバーナード・ショー、アメリカのアーサー・ミラーを皮切りに、主に英米の現代劇を中心に研究する。さらにブロードウェイ・ミュージカルについて研究を進めている。国内では1970年代以降の関西の小劇場、さらに東京を中心とした戦後の新劇、小劇場運動について研究している。それらと並行し、映画分野では映画批評史、映画批評の方法論について研究している。DVDによる研究ではなく、映画館体験を基礎にしているのが特徴である。現在集中的に取り組んでいるのは「ブロードウェイ・ミュージカルの20世紀」というテーマである。

志村 哲（しむら さとし）教授

profile —— 大阪芸術大学音楽学科音楽工学専攻卒業。在学中より尺八史料の全国調査を続けるとともに、各地の虚無僧尺八の作法と吹奏技法を学ぶ。尺八をピリオド楽器と位置づけた音楽学・楽器学的研究で、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科に論文を提出し、博士号(学術)取得。電子装置、コンピュータ、尺八等のパフォーマンスとして種々の現代音楽作品の初演・制作。国際尺八フェスティバルほか国内外で講演・演奏。VRと日本文化を掛合わせたCyber尺八プロジェクトを展開。近年は神社仏閣での奉納演奏、日本伝統文化教育の再構築、尺八博物館運営等に傾倒。

研究分野 —— 音楽の創作と研究、録音と上演において「人間と道具」との関わりをひとつのシステムとして捉える音楽工学理論を構築。音楽情報科学研究会(現・情報処理学会研究会)を共同で設立し、本学では「IT社会のための情報音楽Web博物館」プロジェクトを推進するとともに、音楽と環境をデータベース化する情報音楽学の意義を提唱。ピリオド楽器演奏・研究者として、精神主義的楽器学を追究。新しいテクノロジーを応用した研究にも積極的に取り組み、X線撮影・CTスキャンによる楽器構造の分析と3Dプリンタほかによる楽器造形、音響計測に着手している。

高橋 良輔（たかはし りょうすけ）教授

profile —— 1943年1月11日東京生まれ。'64年、株式会社虫プロダクションに入社、テレビアニメーション創世期に演出として各種作品にあたる。虫プロダクションを退社後、株式会社サンライズ創業期にSF作品「ゼロテスター」を監督しその後の同社の方向を決める。代表作として「太陽の牙ダグラム」(原作・監督/'81)「装甲騎兵ボトムズ」(原作・監督/'83)などがある。ほかにNHK「火の鳥」(監督/'04)「モリゾーとキッコロ」(監督/'05)アニプレックス「FLAG」(原作・総監督/'06)などがある。近年はロシア、中国にもその製作の場を拡げている。

研究分野 —— 日本のアニメーションは1917年に始まっている、というのが定説である。以来100年を超える歴史の中で、時代を変えたと言われるほどの作品はそう多くはない。言い換えれば「エポックメイキング」などと言われる作品である。それらの作品を何故エポックメイキングなのか、なぜ時代を変え得たのか、という観点から、深く掘り下げ研究し要点を抽出する。さらにはその研究の先に、次代を切り開く作品制作のヒントを探るのが目的である。

館 正明（たて まさあき）特任准教授

profile —— 1995年大阪芸術大学芸術学部工芸学科染織卒業。2016年Exhibition of Miniatures「WHAT IS FIBER?」(リトアニア)。2017年第3回金沢・世界工芸トリエンナーレ。2017金沢世界工芸コンペティション(金沢21世紀美術館)、現代工芸の教育2×3人展(染・清流館)、Japanese Fiber Art(リトアニア)。2018年テキスタイルアート・ミニチュール5百花百羅(韓国・福岡)、行為と現象I(染・清流館)。2019年SCYTHIA Mini Textile Art The 9th International Exhibition(ウクライナ)、個展「けしき」祇をん小西(京都)、LE FIL BLEU(フランス)、Miniature Works-The Kyoto-vol.2(京都)、第22回染・清流展(染・清流館、第13回より毎回出品)。共著、染を学ぶ(角川書店)。

研究分野 —— 蠟染めによる作品制作を行い、国内外で発表活動を展開する。蠟染めは蠟を防染材に用いる染色技法である。世界には様々な蠟染めを見ることができるが、日本においてはその技術が高度に発達し、多様な表現がなされている。その中でも素材や技法の特性をより深く把握し、精微に駆使することで得られる造形を探索している。作者のエモーションを排除し、染まるという現象を染めるという行為だけで表現することが染めの本質を見出す方法ではないかと考えている。

中川 滋弘（なかがわ しげひろ）教授

profile —— 東京大学卒業後松竹入社。映画プロデューサー「作品」(監督)「男はつらいよ」「学校」「たそがれ清兵衛」「息子」ほか(山田洋次)「釣りバカ日誌」(栗山富夫ほか)「御法度」(大島渚)「あ・春」(相米慎二)「マークスの山」(崔洋一)「女ざかり」(大林宣彦)「美味しんぼ」「ロケーション」(堀の中の懲りない面々)ほか(森崎東)「岸和田少年愚連隊」(井筒和幸 三池崇史)「傷だらけの天使」(阪本順治)「東京タワー」(松岡錠司)「夢の女」(坂東玉三郎)「熱帯楽園倶楽部」(滝田洋二郎)「怖がる人々」(和田誠)「結婚」(鈴木清順)ほか

研究分野 —— 《シネマvsネットムービー》
映画史は30年ごとに淘汰と進化をくりかえしてきた。19世紀末、キネトスコープに代わってシネマトグラフが勝ち残り、次のトーキー革命では無声映画が消えた。さらにテレビの登場によってスタジオシステムが崩壊し、20世紀末にはデジタル革命でフィルムが消えた。10年を1時間に圧縮すると時計の針が一巡したことになる。いま現れたネットムービーはシネマの足元を崩すかもしれない。「映画館でしか見られない映画」から「映画館でも見られる映画」へ。そして遂には「映画館では見られない映画」の時代が始まった。

中村 康治（なかむら こうじ）准教授

profile —— 音響デザイナー、作曲家、音響・音楽プロデューサー
音響家として主にテレビ、舞台の音響効果を専門とする。従来の音響手法はもとより、コンピューターのサウンドデザインへの応用では、その黎明期から研究を続ける。その過程で、演出の観点に立った楽曲制作やコンピュータミュージックの可能性にも研究範囲を広げ、活動が続ける。

研究分野 —— テレビ、舞台音響デザイン全般。
最先端の電気音響による音響効果が抱える利点と問題点の研究。
演出の観点からの選曲や作曲技法の研究。

西田 真人（にしだ まさと）客員教授

profile —— 1952年兵庫県神戸市生まれ。78年京都市立芸術大学日本画科卒業。93年青塔社入塾。95年日展特選(文化庁買上げ)。97年山種美術館賞展優秀賞。兵庫県芸術奨励賞。98年日展特選。2000年神戸市文化奨励賞。02年東山魁夷記念日経日本画大賞展招待。03年日展審査員。(08、13、19年も)04年日展会員推挙。05年菅橋彦大賞展大賞。07年兵庫県文化賞。08年京都市立芸術大学美術学部教授に就任。神戸市文化賞。16年日展会員賞。17年京都市立芸術大学退任記念展。18年大阪芸術大学客員教授に就任。

研究分野 —— いわゆる日本画という分野での制作活動ですが、ただ花鳥画、美人画、水墨画・等の様式的なこと以上に、岩絵具、金属箔等の持つ、デジタル表現には無い物質感、テクスチャーに注目することで、1300年以上継続されてきた絵画技法の研究、制作。日展が主な作品発表の場ですが、10年程前より日本全国にある101の「一の宮」をテーマに日本の歴史、四季の美しさ、各地の生活風俗が感じられる作品群の制作中で、毎年各地で巡回展を展開中、2021年は沖縄県立美術館にて開催。印刷物表紙等では日本画画材の素材感を活かした抽象表現も継続中。

新田 三郎（にった さぶろう）客員教授

profile —— 1969年 大庭三郎舞台美術研究所に入所。主にモダンダンスの舞台照明を学ぶ。1971年 梶孝三に師事。主にクラシックバレエの照明を創る。その間舞踊団の移動公演に同行し国内主要都市、キエフ、レニングラード等で公演する。その後大阪に移り文化庁主催の演劇公演で全国を回る。舞踊論を邦正美に学ぶ。1977年アメリカ留学時邦正美のダンスの創作等の理論を聴講する。ルドルフ・フォン・ラビンの身体動作表現理論を研究する。

大阪府知事表彰、日本舞台芸術家員

研究分野 —— 舞踊・演劇の舞台においていかに照明変化を少なくして観客に作品の本質を見せるかを考える。ラビンから身体動作表現理論を読み舞台照明は身体表現をありのまま観せる事がより本質に近づくのではないかと。メトロポリタンオペラ団初来日の際カルメンの美術・照明担当ヨゼフ・スポボダの照明に出会い、白色光が持つ空間制御の力に気づく。その後あらゆる演劇、舞踊作品の舞台照明において白色光を使用しその持つ空間性・求心性を考える。

法月 紀江（のりづき としえ）客員教授

profile —— 大阪芸術大学 舞台芸術学科 舞台美術専攻卒業。
在学中より衣裳デザインを始める。創作舞踊を中心に演劇・オペラ・ミュージカルの衣裳デザインをする。1991年オペラ「チェッキーナ」日本舞台美術協会 伊藤嘉祐賞新人賞受賞 1996-97年文化庁派遣芸術家在外研修カナダバンフアートセンターにてギャラリー・ダムス氏に師事。

研究分野 —— 総合芸術に於いて視覚面から作品を支えるものについて、趣味・趣向に流されることなく創作の可能性を広げる演習方法を提案。各表現分野に引き継がれる既存のストックキャラクターに於ける身体と被服の相互作用の分析・基本動作を軸に舞踊衣裳の造形パターンを整理する研究を進める。

長谷川 政弘（はせがわ まさひろ）教授

profile —— 1961年 香川県丸亀市に生まれる。1984年 大阪芸術大学工芸学科金属工芸コース卒業。1986年 金沢美術工芸大学大学院彫刻専攻修了。
一貫して金属を用いた立体作品を制作発表する。ドバイ、スウェーデン、アルゼンチン、アブダビなど海外の国際彫刻シンポジウムに招待され作品を公開制作し現地に設置する。京都、大阪、東京などで個展25回、国内外でグループ展多数開催。日向現代彫刻展で市民大賞、ビエンナーレまぐらざきで準大賞など、美術コンクールで多数受賞。国内外にパブリックアートやコレクション多数。

研究分野 —— 金属立体造形
主な研究テーマは「金属素材の特性を生かした表現の可能性」である。立体作品として用いられる金属は主に鉄、銅、真鍮。アルミニウム、ステンレスなどが上げられる。これらの金属はそれぞれが独特の色や質感、性質を持っている。そして鍛造、鍛造、溶接など様々な技法により造形物として変化する。自身の作品制作を通して金属素材の特性と表現を追求し検証している。それに加え「金属造形作品と場(環境、空間、歴史)との関係性の研究及び検証」「現代工芸と現代美術の関係性とあり方の研究および検証」なども同時に行っている。

樋口 光治（ひぐち みつはる）教授

profile —— 1979年 大阪大学文学部美学科音楽学・演劇学専攻卒業。1983年 大阪大学大学院文学研究科博士前期課程芸術学専攻修了。1988年 大阪大学大学院博士後期課程芸術学専攻単位取得退学。文学修士(大阪大学)。1988～91年 大阪大学文学部助手。1991～93年 大阪芸術大学音楽教育学科専任講師。1993～2002年 同助教授。2002年～06年 大阪芸術大学音楽学科助教授。2006～07年 同教授。2007年～18年 大阪芸術大学芸術計画学科教授。2018年～現在 大阪芸術大学教養課程教授。日本音楽学会会員。美学会会員。

研究分野 —— 西洋音楽史。16世紀後期から18世紀中頃の西洋音楽においてどのように器楽が成立、展開したのかという問題を楽曲分析に基づいて研究。『《平均律クラヴィーア曲集》第1巻のフーガにおける〈性格主題〉と〈楽曲構造〉』、『調性格論序説』、『J・S・バッハの「無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ」に関する一考察』、『シャコンヌとバサカリア』、『西洋音楽史にみるバロック概念の再検討のための序説』、『フーガの楽曲構造と形式規格用語』、『フーガの楽曲構造と形式規定用語その2』

福内 千絵（ふくうち ちえ）講師

profile —— 2008年大阪芸術大学大学院博士課程修了、博士(芸術文化学)。大阪芸術大学大学院芸術研究科嘱託助手、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属現代インド研究センター研究員、関西学院大学先端社会研究所専任研究員などを歴任。現在、国立民族学博物館共同研究員。民族芸術学会、意匠学会、美術史学会、日本文化人類学会会員。

研究分野 —— 民族芸術学。近現代の南アジアにおける絵画造形やイメージについて、宗教実践や植民地経験との関わりから研究。著書『インド ポピュラー・アートの世界—近代西欧との出会いと展開』（共編、千里文化財団）、『コロニアル・インドにおける「美術」の変容—神の表象をめぐる「周辺」からの抵抗』（分担執筆、明石書店）など。論文『明治期のインド市場向け商標デザインの生成に関する一考察』（『民族芸術』VOL.35）『近代インド絵画、ラヴィ・ヴァルマー作品の展開』（『民族芸術』VOL.24）など。

藤木 康成（ふじき こうせい）客員教授

profile —— 1974金沢美術工芸大学卒業。1975より二紀会展に出品。1987神戸具象彫刻大賞展(89,91)1989大阪市制100周年記念コンペ「優秀賞」。第3回現代具象彫刻大賞展「大賞」。第21回京都野外彫刻展「京都府賞上」(94,00,04)1993二紀会展「U氏賞」。1995びわこ現代彫刻展。1996二紀会展「宮本賞」。1999現代美術選抜展(文化庁)。2008那須野が原国際彫刻シンポジウム招待。彫刻三人展「三様の形象」銀座ギャラリームサン。2010テッラ国際彫刻シンポジウム招待(セルビア)。2016第70回記念二紀会展「記念大賞」現在二紀会展彫刻部委員。

研究分野 —— 彫刻素材としては土、石膏、樹脂、木、乾漆、テラコッタ、ブロンズである。形態は単体でなく複数の人体を空間の中に配しバランス・動勢・方向感を重視した有機的に再構成された群像表現を追求、研究。技法として、基本は塑像であるが、石膏・樹脂で成型後にモデリング、カービングを幾度と繰り返し当初のコンセプトを実現すべく、より厳しいフォルムを求める。故に粘土原型とは違った形態に進化。フォルムは自身の形態解釈で単純化・省略・整理が重要と捉えモデリングであるがカービングによる表現とも見える求心的表現を目指す。

森井 宏青（もりい ひろはる）特任准教授

profile —— 画家 ノルウェー・フィンランド美術家交流プロジェクト キュレーター 行動美術協会会員

国内・北欧諸国で個展、キュレーション活動多数。近年では2017年、ノルウェー・クラゲリョー、2020年にはフィンランド・ヘルシンキにて個展を開催。大阪芸術大学内でも講演会や、美術・工芸学科主催による特別講義などを企画、北欧のトップアーティストたちを招いてグローバルな公開授業を行う。2014年フィンランドで企画したインターナショナルエキシビションとワークショップでは、両国のアートにおける「間の構築」についてコンセプトが大きく評価され、「もっとも見るに値する展覧会」に選出された。

研究分野 —— エドワルトムンク研究(創作技法、歴史検証)

フィンランド現代美術

絵画制作研究及び、西洋画における技法・材料学全般、保存修復技術。

制作テーマ 『間の構築とアイデンティティ』

安田 紀子（やすだ のりこ）講師

profile —— 大阪音楽大学卒業後、およそ10年にわたり大阪フィルハーモニー交響楽団、関西歌劇団、大阪音楽大学カレッジオペラハウスで鍵盤奏者及びコレパティートルとして活躍した後渡米。マサチューセッツ州ロンジー音楽院でチェンバロをピーター・サイクス氏に師事し、アーティストディプロマを取得。卒業と同時に同音楽院オペラ科コーチに抜擢される。現在アメリカと日本で演奏及び若手育成に力を注いでいる。ロンジー音楽院ヘッドコーチ、伴奏科講師、ボストン大学オペラプログラム伴奏者及びコーチ。ボストンバロック伴奏者。

研究分野 —— 多岐にわたる伴奏技術と表現。専門分野はオペラにおけるヴォーカルコーチング及び古楽伴奏。アメリカで幅広く使用されているIPA(国際音声記譜法)を習得しイタリア語、フランス語、ドイツ語、英語など声楽作品における明確な発音に力を注いでいる。米、ニューハンプシャー州でのサマープログラム、オペラノースで数々のオペラ作品に携わっている。又、ボストンでは主要なバロック団体で伴奏及びコンサートで通奏低音を努めバロック様式における伴奏の重要性を追求している。M・パールマン、R・ターナー氏の薫陶を受ける。

若生 謙二（わこう けんじ）教授

profile —— 1978年 信州大学大学院修士課程修了。東京大学農学博士。公園のランドスケープの起源であるイギリス風景式庭園の形成過程を探るとともに、動物園デザイナーとして全国の動物園で生息環境展示の実現にとりくむ。最新作は2016年に完成した宇部市ときわ動物園。ヒトと動物の関係学会会長、日本展示学会会長。日本造園学会常務理事・関西支部長を歴任。1998年 日本造園学会賞受賞。2011年 日本造園学会特別賞受賞。2015年、2016年 宇部市ときわ動物園「中南米の水辺」等の施工で日本公園緑地協会、国土交通省都市交通局長賞受賞。

研究分野 —— 造園史・造園学原論。展示学。ヒトと動物の関係学。著書:動物園革命(岩波書店)、共著:ランドスケープ大系(技報堂出版)、比較文化研究の世界(学術図書出版)、生態工学(朝倉書店)、ヒトと動物の関係学(岩波書店)、訳書:よみがえるセントラルパーク(ソフトサイエンス社)、設計:天王寺動物園「アフリカサバンナ」、「アジアの熱帯林」、よこはまスーラシア「チンパンジーの森」、長野市茶臼山動物園「レッサーパンダの森」、飯田市動物園「カモシカの岩場、ペンギンの丘」、熊本市動植物園「ニホンザルの森」。

西岡 陽子（にしおか ようこ）教授

profile —— 1980年 関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期修了。文学修士。日本民俗学会会員。民俗芸能学会会員。1999年 建築史学会賞受賞。

研究分野 —— 巫観盲僧およびその語り物を中心とする研究。都市祭礼研究等。『地神盲僧資料』、『地神盲僧の伝承詞章』、『近世日向の盲僧』、『まち祇園祭すまい』、『造物の諸相』、『近代の放浪—ある浪花節語りの日記から』、『祭りのしつらい』、『一式というこだわり』(『一式造り物の民俗行事』)。